



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』 訳注(7)

真下, 裕之(監修・訳注)
二宮, 文子(訳注)
和田, 郁子(訳注)

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 46:27-61

(Issue Date)

2019

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011595>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011595>



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』訳注(7)

真下 裕之 監修
二宮 文子*、真下 裕之、和田 郁子** 訳注

<I, 101>

御召物¹の館と敷布の館の規則

世界の主人たる御方のご配慮により、さまざまな布が顔^{かんぼせ}を輝かせ、イランのもの、ファラングのもの、ヒタイのもの²が数多現れた。仕事に磨きをかけた親方たちや稀有な技能を備えた匠たちが来て、鍛錬の集まりを盛んにした。御前において、またラホール、アーグラ、ファトゥフプル、グジャラートのアフマダーバード³といった諸都市において諸々のわざが生まれた。さまざまな絵付

* 青山学院大学文学部准教授

** 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教

1 底本ならびに AA Ms. B, AA Ms. C では KRKRAQ と綴られるが [AA Ms. B: 49v; AA Ms. C: 38r]、KRKYRAQ という AA Ms. A の語形が明らかに正当なので、これを採用した [AA Ms. A: 43r]。これは Keräk-yarāq すなわち必要な装備、とくに宮中の必需品を意味する [Doerfer 1963-1975: III, 593-595]。なおこの語について Blochmann は、辞書で意味を確かめることはできないが、用法から明らかに “wardrobe” を意味すると見られる、と述べる [AA (Etr.): I, 93]。(M)

2 Blochmann はこの語を “Mongolian articles” と訳しているが、根拠は不明である [AA (Etr.): I, 93]。(M)

3 底本と AA Ms. C では Aḥmadābād と Guḡarāt の間に wa が入っているが、AA Ms. A、AA Ms. B には wa が不在 [AA Ms. A: 43v; AA Ms. B: 49v; AA Ms. C: 38r]。ここでは後者に従い、Guḡarāt を都市名ではなく地方名と解して訳した。(M)

け (taṣwīr) と刺繍 (naqš) と織り (giriḥ) によって⁴素晴らしい意匠 (ṭarḥ-hā) が広まり⁵、世界を旅した目利きたちを驚愕させた。知識を探求する君主は、わずかな時間でその分野の理論と実践 (ilm wa'amal) における段階の数々を全て身につけられた。この国の明敏なる稀有の職人たちもまたその鑑識眼によって鍛えられ、種々の製織と絹地の装飾 (ṭirāz⁶) が卓越した段階に達した。いかなる国で作られるものでも、御前の宮内作業所で得られる。人々の間に装飾好みが続々と広まり、祝宴の飾りは並外れたものになった。購入されるもの、【宮内作業所で】製作されるもの、献上されるもののいずれの布地であれ、適切な管理に付される。納入されたものから順に、検分、裁断、縫製、着用、施与に付される。一括して納入されるものについては、価格に注意が向けられる。行いの正しい識者たちがいつも相場の動きを活気づけ、過去と現在【の価格】について明察の眼を開く。等級についての知識が短期間で豊かになり、価格は下落した。以前は100ムフルの買い物だったギヤース・ナクシュバンド⁷ (Ġiyāt

4 ここに見られる taṣwīr, naqš, giriḥ を、Blochmann はそれぞれ “figures, patterns, knots” と訳し [AA (Etr.): I, 93]、Habib は “paintings, figures, weaves” と訳する。また、Habib は前の2語をそれぞれ “manual painting on cloth”、すなわち「いわゆる ‘painted chintz’」について言及したものかもしれない、と述べる一方で、刺繍、そして絞り染めを指す可能性もある、とする [Habib 1992: 6]。ここでは、taṣwīr と giriḥ については Habib に従い、naqš については、後出するタクーチャーに関する記述に見られるこの語の Blochmann による訳 [AA (Etr.): I, 94] に従って「刺繍」とした。(W)

5 Habib は底本の読みに基づき、ṭarḥ が ([TAk: 45; MR: III, 986, 1659] に見られる ṭarrāḥī と同様に) 木型を用いた捺染 (いわゆるブロック・プリント) のデザインに言及したものである可能性が高いと主張する [Habib 1992: 6]。しかし、底本では taṣwīr、naqš、giriḥ、ṭarḥ-hā の4語に並列関係があるように記すのに対し、3写本では ṭarḥ-hā の前に wa がなく、並列されるのは taṣwīr、naqš、giriḥ の3語である [AA Ms. A: 43v; AA Ms. B: 49v; AA Ms. C: 38r]。ここでは、これらの写本の記述に従い、ṭarḥ-hā はこれら3語によって描かれる、とくにブロック・プリントに限定されない各種の意匠を指すとみなして訳した。(W)

6 ṭirāz はアラビア文字の字句を文様とした刺繍装飾およびそれを備えた布を意味する [Dolezalek 2016: 81; Stillman & Sanders EI2: Ṭirāz]。イルハン、アブー・サイドのものから送られ、オーストリアアルドルフ4世の経帷子として用いられていた布が、複数のアラビア文字帯で構成される縞柄文様という ṭirāz としての特徴を備えていることについては [Ritter 2016: 233-238]。また衣服の袖口に文字帯の装飾を施す ṭirāz の意匠については [Allsen 1997: 90-92] も見よ。(M)

7 ヤズド(あるいはイスファハーン)生まれの織工、刺繍職人。サファヴィー朝の Šāh ‘Abbās に献上した作品が知られている [Dihḥudā: Ġiyāt Naqšband]。後出の注75も参照。(N)

Naqšband)の手になる織物が50ムフルになったほどである。多くの種類のなかには、三分の一、四分の一よりも安くなったものもある。君主の度量の広さによってそれぞれの集団は各自の規則にしたがって衣をまとい、互いに口を出すことはない。これについて話そうとすると相当長くなるので、世界の主人たる御方の御召になるものについて少しだけ書くにとどめよう。

タクーチャー (takūčiyah)。ヒンド語の上双点付きターのファトゥハ、カーフ、ワーウのスクーン、ペルシア語のジームのカスラ、下双点付きヤーのファトゥハ、書かれただけのハー。一重のヒンド様式の衣である。かつては裾にスリットが入っていて (čāk-dāman) 左結びの帯 (čap-band) を備えていた。世界の主人たる御方が筒型の裾にして右結びの帯に (bi-rāstā) した。7ガズ8ギリフ⁸四方で作られ、そのうち5ギリフは端処理分 (band⁹) になる。刺繍なしの縫製の工賃は1から3ルピーだが、さまざまな刺繍が施されたものは1から4³/₄ルピーである。1ミスカールの絹が使われる。

ピーシュヴァーズ (pīšwāz)。【タクーチャーと】同様のものだが、帯が前の方で結ばれる。帯結びなしで作られることもある。

<I, 102> 二重衣 (dū-tāhī)。6ガズ4ギリフの表地と、4ギリフ短い裏地を使い、4ギリフの端処理と9ギリフの縁取りをして作られる。工賃は1から3ルピーである。1ミスカールの絹が使われる。

王様の刺し子縫い (šāh-āğīdah)。1ギリフにつき60の飾り縫い (nigandah) が施されており、それを「六十本すじ」とも言う。2枚の裏地があるものがほとんどであるが、綿が詰め込まれているものもある。1ガズ四方につき2ルピーの工賃がかかる。

スーザニー (sūzanī)。1/4 スイールの綿と2ダームの絹で作る。返し縫い

8 girih. 長さの単位。4 girihが1 čārakに、4 čārakが1 dar'に、また1 girihは2 bahrに相当する。1メートルは15.4 girihに相当する [Dihjudā: girih]。(W)

9 閉じる、結ぶ、縛る等を意味する動詞 bastanの現在語根に由来し、Blochmannは bindingと訳す [AA (Etr.) : I, 94]。ここでは布の縁がほつれないように閉じることと解し、端処理と訳した。(W)

(baḥyah dūz)の手間賃は8ルピーで、刺し子縫い(āḡidah)には4ルピーかかる¹⁰。

カラミー(qalamī¹¹)。3/8スィールの綿と1ダームの絹で作る。工賃は2ルピーである。

カバー(qabā¹²)。当代の言葉で綿入れの衣のことを言う。1スィールの綿と2ミスカールの絹が使われる。手間賃は1/4から1ルピーである。

ガダル(gadar)。ペルシア語のカーフとダールのファトゥハ、ラームのスクーン。カバーよりも幅広、丈長で多くの綿が入った衣である。ヒンドウスターンでは毛皮の上着の役割をする。7ガズの表地、6ガズの裏地、4ギリフの端処理、9【ギリフ】の縁取りで作られ、2 1/2スィールの綿、3ミスカールの絹が使われる。手間賃は1 1/2から1/2ルピーである。

ファルジー(farḡi¹³)。帯なしで前開きであるが、ボタンを付ける者もいる。

10 Blochmannによると、baḥyah、āḡidahはそれぞれbackstitching、buttonhole stitchを意味するという[AA (Etr.): I, 95]。baḥyahに対する語釈としては、Plattsもback-stitchを挙げており[Platts 1884: 138b]、本訳注でもこれらの解釈に従った。一方、āḡidahは辞書の語釈に従い「刺し子縫い」とした[黒柳 2002: 10b]。(W)

11 詳細不明。いわゆるカラムカーリー(qalam-kārī)すなわち防染剤ないし媒染剤を筆状の工具によって文様として描く布を指すか否か、確証はない。前後の文章で説明される一連の用語はいずれも衣服の形状による種類を指しており、布そのものの種類は問題になっていない。(M)

12 北インドにおいては、カバーと呼ばれる衣服が14世紀半ばには着用されていたようである。当時の形状は首から膝までを覆う長袖の上着で、上質の綿または絹で作られていた[Shivram 2006: 13]。JNでは、Akbar用に特別に作られたカバーとして、1) 刺繍入りの紡毛織の襟と袖口が付いたもの、2) 禁制品の布の旗幟を裁断して裾と襟と袖口の縁取りにしたもの、3) Guḡarātの縐子製のものの3種類が挙げられる。またĠahāngīr自身は、イランでdaglah-i kurdīと呼ばれていた、カバーの上に着る袖なしの腰の下までの長さの衣をdaglah-i nādirīと改めたという[JN (A): 190; JN (T): 219]。Thackstonによると、カバーはĠahāngīr時代の“common garment”で、前部にスリットが入り脇で結ぶ形の長衣であったというが[JN (Etr.) (Thackston): 223 n.8]、Akbar時代のカバーは、ガダルと同様に綿が入ったものとされており、Ġahāngīr時代のものとは形状が異なる可能性がある。なお、カバーはイラン起源と考えられているが、その形状や着方は時代、地域によって異なっていた。例えば、17世紀のイランではカバーの上に、袖なしで丈の短いkurdīか、または袖付きで丈の長いkadabīを着た[Stillman, Stillmann & Majda (E12)]。(W)

イランにおいてカバーが、ボタン前留めの長い上着を指すことについては[Yusoff (E1r)]。イランにおけるカバーについては[Floor 1999: 226]を、また本注釈における上記クルディー kurdīについては[Floor 1999: 227-228]を見よ。(M)

13 「分かれた」という意味のfarḡの語は、本文が説明するこの衣服の様態とおそらく関

衣の上に着ることが多い。表地が5ガズ12ギリフ、裏地が5ガズ5ギリフで、縁取りが14ギリフである。1スィールの綿と1ミスカールの絹が使われる。工賃は1から $\frac{1}{4}$ ルピーである。

ファルグル (fargul¹⁴)。ファーのファトゥハ、ラーのスクーン、ペルシア語のカーフのダンマ、ラームのスクーン。ヤーパンジー¹⁵に似ているが、優美で華麗である。ファラングからもたらされ、今日では老いも若きも身にまとい、権威を増さしめる。さまざまな絹地から作られる。表地は9ガズ6 $\frac{1}{2}$ ギリフ、裏地も同じである。6ミスカールの絹と1スィールの綿が使われる。一重でも二重でも作られる。手間賃は2から $\frac{1}{2}$ ルピーである。

チャクマン (čakman)。毛織物や粗毛織物や蠟引き布から縫われる。世界の王が蠟引きのダーラーイー布¹⁶で作させたものは、たいへん軽くて見栄えがよ

係しているだろう。Ġahāngīrは即位第5年のノウルーズの祝祭に際して、隠棲していたあるシャイフへの恩給1000ルピーとともに、「ファルジーのショール」を恵与した [JN (T) : 95; JN (A) : 80]。なお当該箇所のテキストは、テヘラン刊本がḡarḡī-i sāl (年間の出費)と作り、文を破綻させる一方、アリーガル刊本はfardī sālと意味をなさないが、テヘラン刊本の底本の一つたるインド省写本はfargī sālと正しく作る (Ms. IO Islamic 161, f. 67r)。Rogersの英訳はこの読みに従っているが、Thackstonがこの連語を a fur shawlと訳した根拠は不明である [JN (Etr.) (Rogers) : I, 166; JN (Etr.) (Rogers) : 107]。なおファルジーがヒルアとともに下賜される例が史料に見られるが、これはおそらく「衣の上に着る」という用い方と関係しているだろう [BNL: Ib, 3, II, 405]。 (M)

14 fargulが君主からの下賜品のひとつたり得たことについてはĠahāngīrが記述している [JN (T) : 104, 116, 143; JN (A) : 88, 99, 123]。また18世紀にĀnand Rām Muḥlisが著した辞書MIは、本書の記事に言及しつつ、この単語の綴りについて解説する [MI: 376]。一方19世紀に著作されたペルシア語・ウルドゥー語語彙集LSJは、fargulに対応するペルシア語としてlabādahを挙げる [LSJ: 182]。labādahにはa cloak for rain; a quilted cloakなどの意味があるが、本書の伝えるファルグルの機能がこれと同じであるか否かは定かでない [Platts 1884: 949b]。 (M)

15 yāpanḡī 冬用の上着 (yāpanḡī) [Zenker 1866-1876: 947a]。Blochmannは雨季用の上着との語釈を示している [AA (Etr.) : I, 95, n. 2]。 (M)

16 dārāīは後出する絹布の一覧表の中にも言及されている [AA: I, 106]。なおPlattsはこの語について「赤い絹布の一種」との語釈を与えているが [Platts 1884: 500b]、Akbarの使者としてアーディル・シャーヒー朝に派遣されたAsad Begが同朝君主の返礼品として持ち帰った宝石を収めた小箱は「緑色のダーラーイー布」でできた袋の中に入っていたというから、この布の属性としてその色は問題でないかもしれない [AAB: 38r]。イランにおいて生産されていた絹布にもdārāīと呼ばれたものがあることについては [Floor 1999: 149-50]。 (M)

Lālā Tik Čand (1766年没)の手になるペルシア語辞書Bahār-i 'Aḡamにおいて、dārāī

く、雨はそれに浸み込まない。6ガズで整えられる。5ギリフが端処理分になる。2ミスカールの絹が使われる。毛織物の手間賃は2ルピー、粗毛織物の場合は1 1/2ルピー、蠟引きの場合は1/2ルピーである。

シャルワール (šalwār)。さまざまな生地から縫われる。一重と二重と綿入れがある。3ガズ11ギリフで作られる¹⁷。ベルト (nīfah) が6ギリフで、表地が3ガズ5ギリフである。1 1/4ミスカールの絹と1/2スィールの綿が使われる。工賃は1/2から1/4ルピーである。〈I, 103〉

このような衣装のいずれにも、さまざまな種類がある¹⁸。ターバン布 (čīrah) や腰布 (fūṭah¹⁹) や肩掛け布 (dūpaṭāh²⁰) についての説明は言葉では表現しきれない。祝宴の折に着用されたり、それを下賜することにより当代の大人^{たいじん}を高位に位置づけたりする、高価な賜衣についての説明は、言葉という型には入りきらない。御用のためには、季節ごとに上下揃いの衣 (sar wa pā) 千組が作られ、そのうち百二十組が十二の包みに整えられる。【アクバルは】謙虚さゆえに羊毛の布地 (pašmīnah) をたいそう好み²¹、とりわけショールを用いる。素晴らしき幸運は、御用の衣服が【それを下賜された者の】身長が高くて低くても適度で適切になることで、老いも若きも驚くのである。

世界の主人たる御方は、衣服の数々に別の名前を与えて、新たな輝きで耳を光あふれるものにした。

衣はサルブ・ガティー (sarb gāṭī²²)。スィーンのファトゥハ、ラーのスクー

は多くの色の絹布として定義されている [BA: I, 405; Habib 2003: 530]。(N)

17 Blochmannはこの数値を、必要な布の寸法とみなす [AA (Etr.): I, 96]。(W)

18 底本はyāšadと作るが、A, B, C写本のbāšadを採った [AA Ms. A: 44r; AA Ms. B: 50r; AA Ms. C: 39r]。(W)

19 英語史料ではphota, fautah [Irwin 1955: 29]、ポルトガル語史料ではfotaという語形で現れる [Dalgado: I, 404a-405a]。本書に後出の一覧表では、錦、綿、羊毛の布としてそれぞれ言及されている [AA: I, 105, 109, 110]。(M)

20 dū-paṭāh. ヒンディー語ではdupaṭā。(M)

21 Blochmannはこれを、Abū al-FaḍlがAkbarをスーフイーになぞらえた一例とみしている [AA (Etr.): I, 96]。(W)

22 sarb はヒンディー語で「全体」を、gāṭīは「肩掛け」を意味する [Platts 1884: 651b, 891a]。(M)

ン、バー、ペルシア語のカーフ、アリフ、上双点付きターのカスラ、下双点付きヤーのスクーン。これは「全身を覆うもの」の意である。

ズボン (izār) は「ヤーリ・ピーラーハン」(yār-i pīrāhan²³)。

ジャケット (nīm tanah) は「タン・ズィーブ」(tan zīb²⁴)。

腰布は「パト・ガト」(pat gat²⁵)。ペルシア語のバーのファトゥハ、上双点付きターのスクーン、ペルシア語のカーフのファトゥハ、上双点付きターのスクーン。

ブルカは「チトラ・グピタ」(čitra gupita²⁶)。ペルシア語のジームのカスラ、上双点付きターのスクーン、ラーのファトゥハ、ペルシア語のカーフのダンマ、ペルシア語のバーのカスラ、上双点付きターのファトゥハ。

帽子は「スイース・スーバー」(sīs sūbhā²⁷)。スイーンのカスラ、下双点付きヤーのスクーン、スイーン、スイーンのダンマ、ワーウのスクーン、バー、隠れたハー、アリフ)。

髪紐 (mūy bāf) は「キース・ガハン」(kīs gahan²⁸)。カーフのカスラ、下双点付きヤーのスクーン、スイーン、ペルシア語のカーフ²⁹のファトゥハ、ハー

23 yār-i pīrāhanはペルシア語で「シャツの友」を意味する。(M)

24 tan zībはペルシア語で「体の装飾」を意味する。なお本文においてtan zībは衣服の名称であるが、Irwinによると、ベンガル地方に産する無地の綿布の名称として、英語史料にtanjeebおよびtunzebの語が見えるという [Irwin 1957: 72]。(M)

25 ヒンディー語でpatは「名誉」を意味する一方 [Platts 1884: 895b]、gatが「～に関わる」という意味の接尾辞であると解せるなら [古賀・高橋 2006: 325b]、この別称は「名誉に関わるもの」と解せることになる。(M)

26 čitraはヒンディー語で「姿、像」を意味する [Platts 1884: 423b]。またgupitaはヒンディー語のguptaと解してよいなら、それは「秘匿」を意味するので [Platts 1884: 895b]、ブルカの機能に沿った呼称と解せるだろう。(M)

27 sīsはヒンディー語で「頭」を意味する。また本文の発音解説とは異なり、sūbhāをsōbhāと読めば、これは「飾り」を意味する [Platts 1884: 693a, 711a]。(M)

28 本文の発音解説とは異なり、kīsをヒンディー語のkēsと読めば、これはkēšに同じで「髪」を意味する [Platts 1884: 888b, 889a]。gahanはヒンディー語で天体の「食」を意味するので [Platts 1884: 936a]、ここでは「覆い隠すもの」の意味に転じているのかも知れないが確証はない。(M)

29 参照した写本三点はいずれもkāf-i hindīと作るが、「ヒンド語のカーフ」は意味をなさない [AA Ms. A: 44v; AA Ms. B: 50v; AA Ms. C: 39r]。一方版本においては、底本の他、デリー版もラクナウ版もkāf-i fārsīと作る [AA: I, 103; AA D: 73; AA L: 115]。こ

のファトゥハ、ヌーンのスクーン。

サッシュ (*paṭkā*) は「カト・ズィーブ」 (*kat zīb*³⁰)。カーフのファトゥハ、上双点付きターのスクーン、点付きザーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン、バー。

ショールは「パルム・ナルム」 (*prm narm*³¹)。ペルシア語のバー、ラーのスクーン、ミーム、ヌーンのファトゥハ、ラーのスクーン、ミーム。

羊毛のもの一種である FRD³² は「パルム・ガルム」 (*prm garm*)。ペルシア語のカーフのファトゥハ、ラーのスクーン、ミーム。

また、チベットで織られ、選りすぐられたカプールドゥール³³ は「カプールドゥール」。

ここでは後者に従った。(M)

30 本文の発音解説とは異なり、*kat* をヒンディー語の *kaṭ* と読めば、*kaṭ zīb* は「腰の飾り」を意味することになるので [Platts 1884: 813b]、*paṭkā* の様態に合致した呼称と解せる。(M)

31 この名称は JN においても、Akbar が「Kašmīr のショール」に対して与えた呼称として言及されている [JN (A) : 301; JN (T) : 341]。ヒンディー語で *param* / *parm* は「最高級の」を意味するので、従来研究の説のごとく、この名称は「最高級の柔らかさの(ショール)」を意味することになる [JN (Etr.) (Rogers) : I, 284, n. 1]。仮にそう解するならば、この語義と、本文に示された発音解説とは整合しないことになるし、何より三つの子音のきわめて不自然な連続は、テキストの不全を疑わせる。写本のいずれにおいても、発音解説のテキストは底本と同じであり、修訂の根拠は得られないが、本訳注では読みを「パルム *parm*」と改めた。なおこの用語はアクバルの創案であるとはいえ、その後の時代においても用いられていたことは史料から明らかであり、その多くにおいて君主からの下賜品として言及されていることにも要注意である [JN (T) : 104, 161, 167, 222, 270, 274, 327; JN (A) : 88, 139, 144, 193, 239, 242, 288; INJ: 489, 491, 493, 500; MAI: 251]。(M)

32 この語の読みは確定できない。AA Ms. A は FRMWK とのテキストを呈し、欄外に PRWK との校注を示す [AA Ms A; 44v] 一方、AA Ms. B は FuRD [AA Ms B: 50v]、AA Ms. C は PWDK [AA Ms. C: 39r] とあり、異文はまったく一定しない。また版本においては、デリー版が PWWK、ラクナウ版が PWDK とする [AA D: 73; AA L: 115]。いずれにせよ、有意の語釈を得られない。Blochmann もこの部分は「不可読の単語」として訳していない [AA (Etr.) : 96]。(M)

33 詳細不明。カシユミール語には *kapur-dōra* なる語彙があり、これは “a doubled piece of calico, used as a quilt or for a similar purpose” を意味するというが、これが本文のカプールドゥール (*kapūrdhūr*) に当たるか否かは判然としない [Grierson 1932: 463b]。(M)

履き物 (pāy afzār) を「チャラン・ダラン」(čaran dharan³⁴)。

このように、選りすぐりのやり方で多くのものに名前をお与えになった。

ショールの規則³⁵

万事に精通しておられる君主は以下の4つのことをなされた³⁶。

トゥース (tūs) はこの名前を持つ動物の毛でできている³⁷。その動物のもともとの (aşli³⁸) 色は黒と白と赤から成るといえるが、黒毛が多い。真っ白になるものもある。軽さと暖かさと柔らかさにおいて、匹敵するものはほとんどない。人々は装いのために別の色に染めはしないが、世界の王は多彩な色で飾った。しかし驚くべきことに、それは赤色には染まらない。

34 ヒンディー語でčaranは「足」、dharanは「持つこと、つかむこと、握ること」を意味する [古賀・高橋 2006: 396, 689]。 (M)

35 この「ショールの規則」が上出の「御召物の館と敷布の館の規則」に含まれる下位の節であることは、後に続く表の内容からも明らかである。 (W)

36 Blochmannによると、その内容は、1) トゥースを染めたこと、2) 白アラチャを多彩にしたこと、3) 金刺繍以下の品々に関心を向けたこと、4) 布地の丈を長くしたことである [AA (Etr.) : I, 97]。 (W)

37 Bernierは、カシミールのショールには羊毛製のもの、「羊毛ではなく、トゥースと呼ばれる、大テイバットの一種の野生のヤギの胸毛から取った毛」で作られるものの2種類があること、またトゥースは羊毛製のものよりもずっと高価で、きわめて柔らかく繊細だが、虫害を防ぐためにしばしば抜けて外気にさらす必要があることを伝える [Bernier: 412; Bernier (Jtr.) : 361-362]。 (W)

Čahāngīr は「トゥースのショールの衣」がAkbarのみの御用に供される衣服であったと述べている [JN (A) : 190; JN (T) : 219]。但し、Akbarの使者としてアーディル・シャーヒー朝におもむいたAsad Begは、自分が持ち合わせていた「カシュミール産のショール、トゥースのショール、白色のショール」を同朝君主への手土産に加えており、「トゥースのショール」が少なくとも当人にとっては君主専用のものでなかったことを裏付けている [AAB: 20r]。 (M)

38 19世紀の英国の探検家W. Moorcroftの記録によると、当時KashmirにはLadakh産、あるいはその東方のRudokやChangthang産の「ヤギの毛」がLadakh経由で輸出されており、そのうちの「野生のヤギの毛」が「Asali Tus」と呼ばれたという。色は薄茶で、並外れてしなやかで、これを使って「Tusi」という柔らかいショールが織られたが、その生産量はきわめて限られていた [Moorcroft & Trebeck: I, 348-349]。A. Cunninghamも同様の特徴を持つ毛がLadakhからKashmirに輸出されショールの生産に利用されていることを伝える。またCunninghamは、「Asali Tus」と呼ばれるのはTibetan ibexの産毛であると述べるが、Rizviによると、トゥースはチルーすなわちTibetan antelope (学名Panthlops hodgsoni) の毛である [Cunningham: 200; Rizvi 1999: 51]。 (W)

白アラチャ (safid alačah)。ももとの色があり、それを「模様入り (tarḥ-dār)」とも言う。毛の色は <I, 104> 白か黒である³⁹。白と黒と白黒混合の三様に織られる⁴⁰。白いものは、かつては3~4色以上には染められなかったが、世

39 この箇所ではアラチャは毛織物たるショールの一種として挙がっているが、後出の一覧表では絹布の一種の名称としてもアラチャは挙がる [AA: I, 107]。さらに Irwin によればアラチャは綿と絹の交織による織物であったという。これらのことを考慮すれば、アラチャとは織物の素材以外の何らかの特徴に根ざした呼称であったことになるが、詳細は不明である。なお Irwin は、グジャラート産のものは赤・白ないし青・白の縞模様様が通例であって、金糸・銀糸を用いた飾りが付されることもあったとしている。またベンガルにもアラチャは産したが、グジャラート産のほうが綿の使用比率が高かったため、この布がキャリコに分類されることもあったという [Irwin 1955: 21, 25; Irwin 1957: 66]。また 1619-20 年にオランダ東インド会社がスラトで買いつけた織物の中にアラチャがある [DFI 1617-1623: 128]。また Bernier は、Awrangzīb がウズベク政権からの使者に託した土産品の中にアラチャがあったと伝えており、それは「金か銀の縞の入った絹織物」であったという。またアラチャが「夏の上着とズボン下」を作るために用いられたともいう [Bernier: 136, 150; Bernier (Jtr.): 101, 115]。イランにおけるアラチャについては [Floor 1999: 131-34]。(M)

Blochmann は、アラチャについて any kind of corded (mukhattat) stuff であると述べる [AA (Etr.): I, 97]。一方、辞書には「2色の縞(あるいは筋)のある (muḥattat) 布」との語釈が見える [Dihḥudā: alāčah]。その語源をテュルク語の alā (多彩な色) から派生した alāčah あるいは alāğah (多彩な、斑の) とする説については [Doerfer 1963-1975: II, 102] を見よ。アラチャの定義に関して Habib は、明らかに毛、絹双方の繊維によるアラチャが存在したことを示す AA の記述および Bernier などの欧語文献の記述、中央アジアにおいて綿と麻、あるいは綿と絹で織られる Alācha (ロシア語で pestred) が作られていたとする Burton の研究などを紹介したうえで、その要点は織物にあるのではなく、主に“multi-coloured pattern”にあると結論づけている [Habib 2003: 526; Burton 1997: 370]。なお Irwin と Schwarz は、コロマンデル海岸のアラチャは綿布であったと見なす [Irwin and Schwartz 1966: 58]。Geleynssen de Jongh は、17 世紀前半のバルーチで産出する品物として絹糸・綿糸半々で織られる様々な色の縞のアラチャを挙げるが [G. de Jongh: 11-12]、17 世紀後半の Roques の記録によると、北インドで作られていたアラチャは経糸が絹、横糸が綿の交織布であった。当時はとくにアフマダーバード (Amedabat) で盛んに生産され、漂白や仕上げ加工を施さない生地の状態で売られていたという。また「Bantam と Perse と大モゴル王国の全土にもたらされていたとの記述から、アラチャが東南アジアや西アジアにも輸出されていたことが分かる [Roques: 86-88]。17 世紀後半のイギリス東インド会社史料においてアラチャは、ベンガル地方のマールダー地域で生産される布のひとつに挙げられるほか、マスリバトナムなどコロマンデル海岸北部の商人が調達する品物としても言及されている [Master: I, 398-401, II, 141-151]。例えば、クトゥブ・シャーヒー朝時代の Mīr Muḥammad Sa'īd (Mīr Ġumlah) もおそらくアラチャを含むコロマンデル産織物の西アジアへの輸出に関わっていた [和田 2008: 47-48]。(なお [和田 2008] の引用元の史料の綴り beghilles は誤植で、正しくは bethilles。) (W)

40 Blochmann は、“These stuffs may be had in three colours, white, black, or mixed.” とする。ただし、白黒混合については、紡糸の段階で白黒の毛が混ぜられるのか、織布の

界の王がさまざまな色に染められた。

金刺繍 (zar-dūzī)、カラーバットゥーン (kalābattūn⁴¹)、カシーダ (kašīdah⁴²)、カルガ (qalḡah⁴³)、バードヌーン (bāndhnūn⁴⁴)、チート (čhī⁴⁵)、アラチャ、プルズダール (purz-dār⁴⁶) も気高きご配慮の輝きによる。

また、短いものから長いものに変え、衣を覆うほどの長さになさった。

年月日と価格と色と重さによって等級が決められた。このような指標を当世の言葉でミスルと言う⁴⁷。監督官たちはそれを考慮して、いずれについてもその等級を小裂に記し、その隅に結びつける。たとえ同一の種類に属していても、イラーヒー暦ファルワルディーン月ウルマズド日に宮内作業所に入庫し、価格が高いものは、いちばん高い等級と見なされる。もしも価格が同じなら、日に

際に白黒二色の糸が使われるのか不明である。(W)

41 Habibは goldwire-and-silk weave と訳す [Habib 1992: 6]。ヒンディー語では kalābattū。金または銀で包んだ絹糸、または絹の撚金糸・撚銀糸、あるいは金糸・銀糸を指す。金や銀のフリンジ (房飾り) を意味することもある [Platts 1884: 841b; 古賀・高橋 2006: 208b]。(W)

史料には「カラーバットゥーンを縫い込んだショール」 šāl-i kalābattūn-dūz という用例もある [INJ: 503]。サファヴィー朝時代の史料に見られる単語で、同様の撚金糸、撚銀糸を指すものとして Floor が挙げる Golabtun はおそらく kalābattūn の誤読であろう [Floor 1999: 155-56]。(M)

42 刺繍細工の一種 [Platts: 1884: 838b]。(W)

43 Habibは flower [ed weave] と訳す [Habib 1992: 6]。qalḡahについては [AA (Jtr.) (6) : 38, n. 180]。なお、Blochmannは zar-dūzī から qalḡah までの4種をまとめて stuffs with gold and silk threads とする [AA (Etr.) : I, 97]。(W)

44 Habibによると、絞り染めのこと [Habib 1992: 6; Habib 2003: 528]。Plattsでは bāndhnū の項目に、絞り染めを指す説明のほかに、“a checked or spotted cloth; a kind of coloured silk (syn. gul-badan)” という記述がある [Platts 1884: 127a]。(W)

45 AA Ms. Aは čhēni と作る [AA Ms. A: 45r]。後出する一覧表に付された発音記述に従い、ここでは čhēni と転写するが [AA: I, 109]、これがヒンディー語で「斑点、染み」を意味する čhī ないし čhīni にあたることは疑いない [Platts 1884: 468a, 469a]。本書の発音記述の当否は分からない。なおこの語は布の名称たる「チンツ」の語源である。チンツは一般に手描きの綿布を意味し、本書に後出する一覧表でも čhēni は綿布の一種として挙がる。それゆえ本書のこの記事は、毛織物たるショールにもこの名称が用いられたことを示す材料であることになる。なおチンツが捺染の布をも意味するとの誤解が諸史料に見られることについては [Habib 1976: 184-186]。イランにおけるチンツについては [Floor 1999: 143-48]。(M)

46 purzは「けば」、purz-dārは「けばが多い、きめが粗い」[黒柳 2002: 298a]。(W)

47 miṭl。同様のもの、同種のものを意味するアラビア語。Blochmannはこの語が“a set”の意であると記す [AA (Etr.) : I, 97]。(W)

ちの順序で等級の上下が決まる⁴⁸。同格の日に入庫したものであれば、より軽い方が高い等級になる。同じ重さのものであれば、以下のような順序に従い、色次第でより高い等級になる。すなわちトゥース色、白アラチャ色、ルビー色、金色、オレンジ色⁴⁹、真ちゅう色、えんじ色、草色、綿の花の色、白檀色⁵⁰、アーモンド色⁵¹、紫色、ナツメ色、小オウム色、蜂蜜色、ユリ色⁵²、マンジャニー色⁵³、チコリの花の色⁵⁴、小リンゴの色、干し草色、ピスタチオ色⁵⁵、PRKL色、棘花の色⁵⁶、BĜY BRN⁵⁷色、ボージュ・パトラ⁵⁸色、バラ水の色⁵⁹、空色、カルガの花の色 (qalgī)、水の色、オリーブ色⁶⁰、濃紅色 (ġigārī)、エメラルド色⁶¹、焼き物色⁶²、

48 すなわち、元日に献上された品は評価が高いことになる。(W)

49 nāranġī. Naqviは、綿織物の染色に関するペルシア語写本 (18世紀半ば) *Ḥulāṣat al-Muġarrabāt* の内容にもとづいて、32種類の色があったことを明らかにしている。その中には「オレンジ色」も含まれており、染料の調合法も説明されている [Naqvi 1967: 49]。(M)

50 *Ḥulāṣat al-Muġarrabāt* には「白檀色」およびその染料について記述されているという [Naqvi 1967: 52]。(M)

51 *Ḥulāṣat al-Muġarrabāt* には「アーモンド色」およびその染料について記述されているという [Naqvi 1967: 55]。(M)

52 sūsānī. *Ḥulāṣat al-Muġarrabāt* には Sausni という「青みがかった色」およびその染料について記述されているという [Naqvi 1967: 55]。(M)

53 maṅġanī. Blochmannはこの語を「Ratanmanjaniの花のような色」とする。ratanmaṅġaniについては既出 [AA (Etr.) : I, 97-98; AA (Jtr.) (6) : 33]。ただし、ratanmaṅġaniがmaṅġaniと同じものか否かについては定かでない。(M)

54 gul-i kāsnī. kāsnīの語にはチコリ (kāsnī)の色という意味がある [Platts 1884: 801a]。(M)

55 fustuqī. *Ḥulāṣat al-Muġarrabāt* には「ピスタチオの緑色」Sabz pistaiおよびその染料について記述されているという [Naqvi 1967: 55]。(M)

56 gulhār. ヒンディー語のkaṭ'āīまたはkaṭ'āyāに同義。紫の花をつける棘のある植物 (学名 *Solanum jacquini*) [Platts 1884: 814a]。(W)

57 底本はBRNと作るが、諸写本はいずれもBĜY BRNとする [AA Ms. A: 45r; AA Ms. B: 50v; AA Ms. C: 39v]。BĜYの意味は不明である。一方BRNについては、ヒンディー語で *Crataeva Roxburghii* (フウチョウソウ科低木インドギョボク)を意味する *barun, barnā* という単語にあたるかもしれない [Platts 1884: 149a; 古賀・高橋 2006: 930a]。(M)

58 bhōġ-patra. ヒンディー語でカバノキ科高木ペーパーバーチ [古賀・高橋 2006: 1020a]。(W)

59 gul-ābī. *Ḥulāṣat al-Muġarrabāt* には gul-āb-i qarārī という「色あせないピンク色」およびその染料について記述されているという [Naqvi 1967: 49]。(M)

60 zaytūnī. Blochmannは「油の色」oil-colouredと訳すが、従えない [AA (Etr.) : I, 98]。(M)

61 zumurrudī. *Ḥulāṣat al-Muġarrabāt* には「エメラルド・グリーン」およびその染料について記述されているという [Naqvi 1967: 51]。(M)

62 čnī. Blochmannは *bluish like China-ware* と訳すが、根拠は不明である [AA (Etr.) : I, 98]。(M)

スマイレ色、ピンク色、濃い色⁶³、じゃ香色、じゅずかけ鳩の色。一日の状況から一年の規模を計り知れよう。

以前は、ショールはカシュミールから時々もたらされていたに過ぎない。豊かな人々も1枚を四重にして長く使ったものだった。今日では、古いも若きも畳まずに肩にかけている。世界の支配者たる御方の発明によって、見た目に映える二枚合わせのもの⁶⁴を人々が常に着ている。大王のご配慮により、カシュミールではショール織りが活況を呈した。ラホールでは工房 (*kārḥānah*) が1,000以上になった。経糸に絹、緯糸に羊毛を用いて、ショールに似せたものが織られている。それはマーン (māyān) という。これら両者を使ってターバン布や腰布その他が整えられる。

この宮内作業所における価格⁶⁵の一部を表にして、見識を補うこととした。

63 *anbūh*. 「濃密な」を意味する形容詞である。直前の「ピンク色」(*ḡihrah-ī*)の修飾語かもしれないが、底本も Mss. A, C も、オーバーラインによって両者が独立した項目であることを示している。Blochmannはこの箇所を「マンゴー色」*mangoe coloured*と訳すが、根拠は不明である [AA (Etr.): I, 98]。なお *Ḥulāṣat al-Muḡarrabāt* には、「濃緑色」を意味する *sabz anbūh* という色の名称およびその染料について記述されているという [Naqvi 1967: 50]。(M)

64 *dū-tā*. 従来研究においてこの一節が、二枚の布地の裏面どうしを縫い合わせて裏面が見えないようにしたことを述べたものと解されてきたことについては [Rizvi & Ahmed 2017: 150]。(M)

65 底本は *laḥṭī az-īn kār-ḥānah* 「この宮内作業所の一部」と作るが、諸写本に従い、*laḥṭī arz-i īn kār-ḥānah* 「この宮内作業所における価格の一部」とテキストを改めた [AA Ms. A: 45r; AA Ms. B: 50v; AA Ms. C: 39v]。(M)

<I, 105>

錦 (zarrīn)		
名称	読み ⁶⁶	価格
ヤズド産の金糸織りのピロード (maḥmal-i zar-baft)		1点 (ṭāq ⁶⁷) あたり15ムフルから150ムフルまで
ファラング産の金糸織りのピロード		1点あたり10ムフルから70ムフルまで
グジャラート産の金糸織りのピロード		1点あたり10ムフルから50ムフルまで
カーシャーン産の金糸織りのピロード		1点あたり10ムフルから40ムフルまで
ヘラート産の金糸織りのピロード		—
ラホール産の金糸織りのピロード		1点あたり10ムフルから40ムフルまで
BRSH ⁶⁸ の金糸織り		1点あたり3ムフルから70ムフルまで
ムタツバク (muṭabbaq ⁶⁹)		1点あたり2ムフルから70ムフルまで
ミーラク (mīlak ⁷⁰)		1点あたり3ムフルから70ムフルまで
グジャラート産の金糸織り		1点あたり4ムフルから60ムフルまで
グジャラート産のタース (ṭās ⁷¹)		1点あたり1ムフルから35ムフルまで
ダーラーイー・バーフ (dārāī bāf ⁷²)		1点あたり2ムフルから50ムフルまで
ムカツヤシュ (muqayyaš ⁷³)		1点あたり1ムフルから20ムフルまで

66 底本には「読み」の欄がないが、諸写本に従い補った。(M)

67 以下の複数の一覧表には、助数詞として ṭāq および 'adad が見えるが、両者の意味の相違は不明である。翻訳ではそれぞれ「点」「枚」と訳したが、いずれも根拠の乏しい暫定案に過ぎない。ṭāq が衣服の助数詞として用いられることについては [Dihḥudā: ṭāq] を見よ。(M)

68 不詳。Blochmann は Barsah との読みを与えているが、根拠は不明である [AA (Etr.): I, 98]。(M)

69 布の一種の名称として各種の辞書に在証できる単語であるが、詳細は不明である [Dihḥudā: muṭabbaq]。Serjeant はこの語を “folded (or shrunk)” と訳している [Serjeant 1946: 106]。またサファヴィー朝時代の史料に見えるこの語が「高価な絹の織物」を意味することについては [Floor 1999: 177]。(M)

70 分厚い布の一種の名称というが、詳細は不明である [Dihḥudā: mīlak; Anwarī 1381 Sh.: VII, 7575b]。Della Valle がカーシャーン産の絹布の一つとしてミーラクを挙げていることについては [Floor 1999: 203]。(M)

71 錦織の布の一種の名称というが、詳細は不明である [Dihḥudā: ṭās; Anwarī 1381 Sh.: V, 4839b]。(M)

72 dārāī bāf は、後出する絹布の一覧表にも言及されるから、錦織の絹布たるものと通常の絹布のものと2種類の dārāī bāf があったことになる [AA: I, 107]。また既出の dārāī との関係は不明である [本訳注31頁]。なお dārāī bāf はサファヴィー朝の史料にも見える用語である [TAAA: 755]。(M)

73 金糸・銀糸の経糸を備えた織物 [Dihḥudā: muqayyaš; Anwarī 1381 Sh.: VII, 7277b]。(M)

シルヴァーニー (šīrwānī ⁷⁴)		1点あたり6ムフルから17ムフルまで
ファラング産のムシャツジャル (mušağğar ⁷⁵)		1ガズあたり1ムフルから4ムフルまで
ファラング産のディーバー (dībā ⁷⁶)		1ガズあたり1ムフルから4ムフルまで
ヤズド産のディーバー		1ガズあたり1ムフルから1½ムフルまで
ハーラー (ḥārā ⁷⁷)		1ガズあたり5ルピーから2ムフルまで
ヒタイ産のアトラス (atlas ⁷⁸)		—
ヒタイ産の帯 (nawār)		—
ハッズ (ḥazz ⁷⁹)		—
メッカからやって来るタフスィーラ (tafšīlah ⁸⁰)		1ガズあたり15ルピーから20ルピーまで

74 後出の絹布の一覧表には「シルヴァーニー」šīrwānīが言及される [AA: I, 107]。いずれにせよこの布については詳細不明。(M)

75 枝や葉など樹木の柄を織りだした布を意味する [Dihḥudā: mušağğar; Anwarī 1381 Sh.: VII, 7032b]。注7に既述の Ġiyāt Naqšbandが Šāh ‘Abbāsに献上したのは「ムシャツジャルの金糸織り」zar-baft-i mušağğarであった [TNas: 49]。(M)

76 色付きの絹糸で織られた絹布を意味する [Dihḥudā: dībā; Anwarī 1381 Sh.: IV, 3453b]。この名称の布がムガル帝国をはじめとする南アジアの宮廷で確かに使われていたことの例としては [MQSM: 85r; BNL: I, 188]。なおこの単語については、17世紀にインド、イランを旅行したイタリア人 Teixeiraが言及しており、宮廷の中だけではなく、一般的に用いられていた用語であったことが分かる [Dalgado: II, 360b]。イランにおける dībāについては [Floor 1999: 152-153]。(M)

77 波紋のある絹布 [Dihḥudā: ḥārā; Anwarī 1381 Sh.: IV, 2620a]。ḥārāは後出の絹布一覧表にも見える [AA: I, 106]。イランにおける ḥārāについては [Floor 1999: 165]。(M)

78 縞子織(サテン)の布を意味する。後出する絹布の一覧表にも3種類の atlasが言及されている [AA: I, 107]。またこの単語が、宮廷の中だけではなく、Fryerや Tavernierといった17世紀の欧人旅行者たちに言及されるほど、一般的に用いられていたことについては [Dalgado: I, 65b]。イランにおける atlasが絹・綿の交織による織物であったことについては [Floor 1999: 134-137]。(M)

79 Mss. A, C は 𐤇𐤐 との異文を呈するが、意味を成しておらず、この語が難読語であったことをうかがわせる [AA Ms. A: 45v; AA Ms. C: 40r]。絹あるいは絹・毛の交織によって製された布を意味するというのが [Anwarī 1381 Sh.: IV, 2744b-2745a]、本表が錦の織物の一覧であることを考慮すると、この箇所で意味されているのは、金糸・銀糸をも織り込んだ布ということになろう。ḥazz という名称はハラジー朝君主 ‘Alī al-Dīn Ḥalaḡī (位1296-1316)の価格統制の対象となった各種の絹布の一つとして史料に見える [KhF: 22; TFSB: 310]。サファヴィー朝時代の史料にもこの語が在証されることについては [Floor 1999: 166]。(M)

80 tafšīlahは絹布の一覧表にも再出する [AA: I, 107]。この語については両箇所とも、諸写本のテキストは BFDLH, TFSLH との異文を呈しており、この語が難読語であったことがうかがえる [AA Ms. A: 45v, 46r; AA Ms. B: 51r, 51v; AA Ms. C: 40r, 40v]。この語が指す

グジャラート産のクルタ向け布		1 ガズあたり 1 ムフルから 20 ムフルまで
ミンディール (<i>mindīl</i> ⁸¹)		1 ガズあたり 1 ムフルから 14 ムフルまで
ターバン布		1 ガズあたり 1/2 ムフルから 8 ムフルまで
肩掛け布		1 ガズあたり 6 ルピーから 8 ルピーまで
腰布		1 ガズあたり 1/2 ムフルから 12 ムフルまで
ベッドカバー (<i>palang-pū</i> ⁸²)		1 ガズあたり 1 ムフルから 20 ムフルまで

布の特性は定かでないが、語義に照らせば「切り分けた布」を指した可能性はある [Lane 1863-1893: VI, 2406b]。但し、その場合、この一覧表において、価格表示が長さに従量的であることは説明が付かなくなる。いずれにせよこの用語は、欧語文献に *tepseel*, *topseile*, *taffacila* などの語形で現れる「絹・綿交織の縞柄の安価な布」に対応すると考えられる [Irwin 1955: 30]。ポルトガル語文献に現れる *tafecira*, *tafecyra* などの語も *tafšīlah* に由来するという [Dalgado: II, 336a-336b]。オランダ東インド会社の文書に頻出する *taffechela* もこれにあたる [DFI 1617-1623: 38 & *passim*; DFI 1624-1637: 83 & *passim*]。Pelsaert はスインド地方の産物の一つとして、この絹布に相当する *taffacille* という用語を挙げている [Pelsaert R: 279]。イランにおけるタフスィーラについては [Floor 1999: 199]。(M)

オランダ東インド会社史料の *taffachelas* は一般に *tafšīlah* のことと見なされている [Kooijmans & Schooneveld-Oosterling 2000: 112]。Geleynssen de Jongh はバルーチ産織物の一種に「*nicquanijs* すなわち縞柄の *taffacila*」を、ヴァードーダラー産のものとして「様々な種類で縞柄の *taffachilas*」を挙げる [G. de Jongh: 11, 27]。なお、FJ および FR には *tafšīlah* という綴りで絹織物の一種を意味する語が見られる [FJ: II, 1467a; FR: I, 210]。(W)

81 *mindīl* ないし *mandīl*。この語は後出の綿布の一覧表においても言及されるので、これが素材に根ざした呼称でないことは明らかである [AA: I, 108]。辞書にはターバン布、手拭い、腰布など複数の意味が挙げられており、いずれとも定めがたい。この語で示される布が装身具としても衣服としても用いられたことについては [Golombek 1988: 32-33]。またサファヴィー朝時代のイランにおいてこの語はターバン布を指したという [Yūsufī Elr; Floor 1999: 174]。1604年の秋に行われたダシャーラーの祝祭で、Akbar はマンサブダール、アハディー各名に、その位階に応じた下賜を行っており、*mindīl* はそのうち最下級の「お目見えのアハディーたち」に給された下賜品であった [INJ: 503]。欧語史料に *mandilla*, *mundilla*, *mundeel* の語形で現れる布の呼称が *mindīl* に対応していると推測できる。Irwin はこれを絹・綿交織の縞模様の布であるとしている [Irwin 1957: 70]。17世紀後半、ベンガル地方北部のマールダー地域で生産される *mundeel* は英国東インド会社の取引品目であったが、それらは *towel* ないし *loin-cloth* を指しているという [MDC: 9 & *passim*]。(M)

1603年のオランダ語史料に見られる *Cain mandil* (*cain* <*kain* はマレー語で「布」の意) もこの布のことか。この史料では、コロマンデル海岸北部からバンドラ諸島にもたらされる布の一種として挙げられており、青い布あるいは白い縞が密に入った布であるとされる [Memorie 1603: XIV]。(W)

82 英語史料には *palamposh*, *palampore* などの語形で言及される [Irwin 1955: 29]。(M)

<I, 105-107>

絹の布		
名称 ⁸³	読み	価格
ファラング産のピロード		1ガズあたり1ムフルから4ムフルまで
カーシャーン産のピロード		1点あたり2ムフルから7ムフルまで
ヤズド産のピロード		1点あたり2ムフルから4ムフルまで
マシュハド産のピロード		1点あたり2ムフルから4ムフルまで
ヘラート産のピロード		1点あたり2ムフルから4ムフルまで ⁸⁴
ハーフ産のピロード		1点あたり1 1/2ムフルから3ムフルまで ⁸⁵
ラホール産のピロード		1点あたり2ムフルから4ムフルまで
グジャラート産のピロード		1ガズあたり1ルピーから2ルピーまで
プーラブ ⁸⁶ 産のカティーファ (qaṭṭfah ⁸⁷)		1ガズあたり1ルピーから1 1/2ルピーまで

83 底本には見出し項目の行がないが、諸写本に従い補った。(M)

84 底本は「1 1/2ムフルから3ムフルまで」とするが、諸写本はいずれも「2ムフルから4ムフルまで」とするので、テキストとして後者を選った [AA Ms. A: 45v; AA Ms. B: 51r; AA Ms. C: 40r]。(M)

85 底本は「2ムフルから4ムフルまで」とするが、諸写本はいずれも「1 1/2ムフルから3ムフルまで」とするので、テキストとして後者を選った [AA Ms. A: 45v; AA Ms. B: 51r; AA Ms. C: 40r]。(M)

86 pūrab / pūrv はヒンディー語で「東」を意味する。ムガル帝国時代のペルシア語史料においては、デリー、アグラーからみて東方に位置するガンジス川中流域を指し、「東国」のごとき意味合いで用いられた。この地域に位置するジャウンプルを都としたシャルキー朝（この王朝名じたい「東方王朝」の意である）の君主を指して、「プーラビーヤのスルターン」と記す史料上の用語法もある。この用語が通用していたことは、同時代の欧語文献に Purbà, Porop, Poerop などと音写されて現れることから明らかである [Barros: IV, ix, 9; Pelsaert R: 249 & passim]。(M)

87 辞書にはヴェルヴェット、サテンという布地の種類を指す語釈の他、風呂上がりに体を拭くための毛羽立ちのある布、といった機能に根ざした語釈もある一方 [Anwarī 1381 Sh. : VI: 5559; Steingass 1892: 978b; 黒柳 2002: 1303a]、アラビア語として qaṭṭfah および qaṭṭif は「絨氈」を意味するという [鎌田 2016: 21]。最後の語釈は、欧語文献に

タージャ・バーフ (tāḡah bāf ⁸⁸)		1点あたり2ムフルから30ムフルまで
ダーラーイー・バーフ		1点あたり2ムフルから30ムフルまで
ムタツバク		1点あたり1ムフルから30ムフルまで
シールヴァーニー (šīrwānī)		1点あたり1 1/2ムフルから10ムフルまで
ミーラク		1点あたり1ムフルから7ムフルまで
遠国産のキムハーブ (kimḥāb ⁸⁹ ; wilāyat)		1点あたり1ムフルから5ムフルまで
タヴァール (tawār ⁹⁰)		1点あたり2ルピーから2ムフルまで
フリー (ḥwūrī ⁹¹)		1点あたり4ルピーから10ルピーまで

頻出する *alcatif*, *alcatifa* などの語に対応する [Yule & Burnell 1903: 11b]。16世紀初頭の Barbosa はグジャラート地方の産物の一つとして「あらゆる濃い色付きの *alcatifa*」を挙げるが [Barbosa: I, 208]、これをパイルのある絨毯と解する説については [鎌田 2016: 82]。また Linschoten もグジャラート地方の産物として「*alcatiffa* と名付けられた絨毯」に言及している [Linschoten: I, 46; Linschoten (Jtr.): 120, 133]。なおカシュミール地方の君主 Zayn al-Ābidīn (位 1420-1470) にグジャラート地方の君主が贈った *katepha* という布 (*vastra*) は疑いなく *qaṭṭīfah* に対応する (ZRT: 236; Chandra 1961: 42)。 (M)

Geleynssen de Jongh はアフマダーバードの産物のひとつに、「金の *alcatijven*」を挙げる [G. de Jongh: 42]。また Pelsaert は、*alcatijven* の産地としてグジャラート地方以外にも、ジャウンプルやアーグラ、ラーホールといった町を挙げる [Pelsaert K: 117, 148; Pelsaert R: 252, 254, 277]。オランダ東インド会社は各地の君主や有力者へ贈り物としてインド産やイラン産の *alcatijf* (*allecatijff*, *allacatijff* などの語形も見られる) を利用することがあったが、中でも日本はその送り先として度々言及される。17世紀の事例として [GM: I, 483-484; II, 293, 421; III, 306; V, 222] など。1651年に日本の将軍に送ろうとした「大きな *alcatijf*」については、長崎への輸送途中で腐敗してしまったためアフマダーバード (Amadabath) で新たに作らせ始めたとの報告が見られる [GM: II, 549]。 (W)

88 詳細不明。 (M)

89 *kimḥāb* ないし *kamḥāb*。 *kamḥā* あるいは *kamḥwāb* の語形もある。柄入りで多色の毛羽の少しある布 [Anwarī 1381 Sh.: VI: 5924a]。欧語史料で *kincob*, *kamka*, *kheenkaub* などとつづられるこの用語の語源に関する諸説については [Yule & Burnell 1903: 484a]。またイランの史料にもこの語が見えることについては [Floor 1999: 160]。 (M)

90 「荷造り用の縄」を意味するが [Dihḥudā: tawār]、布の名称としては詳細不明である。 (M)

91 布の一種という語釈があるが、詳細は不明である [Steingass 1892: 485a]。 (M)

ファラング産のムシャッジャル		1ガズあたり2ルピーから1ムフルまで
ヤズド産のムシャッジャル		1点あたり1ムフルから2ムフルまで
ファラング産のアトラス		1ガズあたり2ルピーから1ムフルまで
ヘラート産のアトラス		1点あたり5ルピーから2ムフルまで
ハーラー		1ガズあたり1ルピーから6ルピーまで
三色布 (sih rang ⁹²)		1点あたり1ムフルから3ムフルまで
クトニー (qutnī ⁹³)		1点あたり1 1/2ルピーから2ムフルまで
ファラング産のカターン (katān ⁹⁴)		1ガズあたり1/2ルピーから1ルピーまで

92 辞書には用例を在証できない。詳細不明。(M)

93 字義上は「木綿の絹布」となる。経糸、緯糸に絹糸だけでなく綿糸も用いて織った布を指すという [Dihjūdā: qutnī]。これは欧語文献において *cuttane* などの転写語形で現れるもので、英国東インド会社にとってはグジャラート地方からの主要な輸出品であって、絹と綿の交織で、通常は縞柄であったという [Yule & Burnell 1903: 289a; Irwin 1955: 27]。また18世紀後半、同地方の Sūrat 港からアラビア半島の Ġiddah に輸出された製品の中にクトニーがあることについては [高松2017: 735]。イランの史料におけるこの語の意味については [Floor 1999: 134-37]。(M)

Roquesによると、クトニーは経糸が絹、緯糸が綿の朱子織 (satins) であった。彼が見た1670年代以降のアフマダーバードでは、無地の織物のほかに縞物や花模様などの柄入りのものがあり、花模様は金糸や銀糸で入れられることもあったという [Roques: 89-93]。ただし Gokhale によると、金糸の花模様入り絹綿交織布がアフマダーバードで作られ始めたのは1638年頃のこととされている [Gokhale 1969: 191]。これが正しいとすれば、Akbar 時代にはそのようなものはまだ存在しなかったかもしれない。1620-30年代にブルハーンプル、バルーチ、スーラトに駐在した Geleynssen de Jongh は、アフマダーバード産の織物に「attalas および cattonija と呼ばれる無地の、また縞柄の朱子織」があることを伝えているが、前者がアトラス(注78に既述)、後者がクトニーを指すと考えられる [G. de Jongh: 42]。(W)

94 katān は亜麻ないし亜麻布を意味するが、この文脈では亜麻を織り込んだ絹布となるか。但しこのような意味での語釈は辞書に在証できない。また本書においては後出する綿布の一覧表に、「小カターン」 katānčah が言及されているが、これについても、亜麻を織り込んだ綿布であることが類推できること以外、詳細は不明である。なおイランにおいて亜麻と綿布の交織の織物に対してこの語が用いられた例があることについ

ターフタ (täftah ⁹⁵)		1ガズあたり $\frac{1}{4}$ ルピーから2ルピーまで
アンバリー (anbarī ⁹⁶)	ハムザのファトゥハ、隠れたヌーン、バーのファトゥハ、ラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	1ガズあたり4ダームから $\frac{1}{2}$ ルピーまで
ダーラーイー		1ガズあたり $\frac{1}{5}$ ルピーから2ルピーまで
スティイー・プーリー (sitī pūrī)	スイーンと上双点付きターのカスラ、下双点付きヤーのスクーン、ベルシア語のバーのダンマ、ワーウのスクーン、ラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	1点あたり6ルピーから2ムフルまで
カバー・バンド (qabā-band)		1点あたり6ルピーから2ムフルまで

ては [Floor 1999: 163]。(M)

95 絹布の一種であり、この用語自体が「捻られた」という意味のベルシア語であるが、本書が意味する、この布の具体的な様態は不明である。欧語文献には *tafeta*, *taffaty*, *taffata*, *taffatil* などの語形で現れ、いずれも何らかの絹布を指していることは明らかである [Barbosa: I, 208; Pelsaert R: 279; Roe: 126, 285; Terry: 24]。なお今日「タフタ織り」は琥珀織りに同義である。イランにおけるターフタについては [Floor 1999: 199-201]。(M)

FJやFRには「絹織物の一種」との簡単な言及がある [FJ: I, 265-266; FR: I, 195]。Roquesによると、ターフタは「灰色と黒を除くあらゆる色」に染められ、通常は丸く巻かれて裏側しか見えない状態で重さを基準に売られていた。また、金や銀の花模様のある薄いターフタはカバー (*cabayes*) [本訳注30頁] に使われたという [Roques: 95]。(W)

96 Habibによると、*Siyāq Nāmāh*において毛布や錦織りの縁取りに使われると説明される布 [Habib 2003: 527]。ヒンディー語で *anbar* は衣服、着物、衣料を意味するが、この語とアンバリーとの関係は定かでない [古賀・高橋 2006: 9b]。(W)

タート・バンド・プーリー (⁹⁷ tāt band pūrī)	ヒンド語の上双点付きター、アリフ、ヒンド語の上双点付きターのスクーン、バーのファトゥハ、ヌーンのスクーン、ダール	1点あたり2ルピーから1 ¹ / ₂ ムフルまで
ラーフ (⁹⁸ lāh)	ラーム、アリフ、ハー	1ガズあたり ¹ / ₇ ルピーから ¹ / ₃ ルピーまで
ミスリー (⁹⁹ miṣrī)		1点あたり ¹ / ₂ ムフルから1ムフルまで
サール (⁹⁹ sār)	スイーン、アリフ、ラーのスクーン	1ガズあたり ¹ / ₁₀ ルピーから ¹ / ₅ ルピーまで
タサル (⁹⁹ tasar)	ヒンド語の上双点付きターのファトゥハ、スイーンのファトゥハ、ラーのスクーン	1枚 (' ⁹⁹ adad) あたり ¹ / ₃ ルピーから2ルピーまで
クルター向けの素のアトラス		1ガズあたり ¹ / ₂ ルピーから1ルピーまで
カプールヌール (⁹⁹ kapūrñūr)。かつてはカプールドゥール (⁹⁹ kapūrdhūr) と呼ばれていた。	カーフのファトゥハ、ベルシア語のバーのダンマ、ワーウとラーのスクーン、ヌーンのダンマ、ワーウとラーのスクーン	1ガズあたり ¹ / ₈ ルピーから1ルピーまで

- 97 本書に後出するベンガル州の地誌に、Khūrahghāt県 (sarkār) の産物として、絹布とともに「タート・バンドの布」pārçah-i tāt band が言及されている [AA: I, 390]。これをジュートと解するのが誤説であり、正しくはエリ・シルク (ヒマシの葉を食して育つ蚕から産する絹糸・絹布) を指すことについては [Habib 1976: 187]。エリ・シルクはアッサム地方など北東部インドの産品であり、Awrangzībのアッサム地方侵攻を記す史書は同地の特産品の中に「絹布の一種であり、天幕やスクリーン qanātを作る」tāt band に言及している [AIN: 724]。(M)
- 98 「ガーゼに似た上質絹布の一種」[Platts 1884: 948a]。なお底本は価格を「¹/₃ルピーから¹/₇ルピーまで」とするが、この価格帯表示は、低価格を初項に、高価格を次項に挙げるという同表の原則にあわない。それゆえここでは写本2種のテキスト「¹/₇ルピーから¹/₃ルピー」を採る [AA Ms. A: 46r; AA Ms. C: 40v]。(M)
- 99 ヒンディー語では (1) 柞蚕糸。ヤママユガ科のガ (Platts によると、Bombyx paphia) の繭から採れる糸；タッサールシルク (2) 絹紬；柞蚕絹布；タッサールシルクを意味する [古賀・高橋 2006: 530a; Platts 1884: 357a]。オランダ東インド会社史料では tesser と呼ばれており、「野生の絹」つまり野蚕糸によるタッサールシルクであることが認識されていた [Van Dam: II-2, 21]。Master はフーグリヤパーレーシュワルで入手される tesser ないし tester を 'herba' とみなしている [Master: II, 81-85]。Tussah, tusser [Yule & Burnell

アラチャ (alačah)		1ガズあたり $\frac{1}{5}$ ルピーから2ルピーまで
タフスィーラ		1枚あたり8ルピーから12ルピーまで

<I, 108-109>

綿布		
名前 ¹⁰⁰	読み	価格
ハーッサ (hāṣṣah ¹⁰¹)		3ルピーから15ムフルまで ¹⁰²

1903: 945b-946a] も参照のこと。(W)

100 底本には見出し項目の行がないが、諸写本に従い補った。(M)

101 本書の別の箇所、Sarkār-i SahāranpūrのなかのČarthāwalの名産品として「hāṣṣahやčawtārのような白い生地」が挙げられる[AA: I, 524]。オランダ東インド会社史料では、主にベンガル地方で入手される上質布として類出する。そのごく一部の例として、[GM: I, 292; III, 645; IV, 254; Van Dam: II-2, 49, 71-72, 74, 79]。また、1603年のオランダ語史料によると、当時マレー海域にもたらされていたベンガル産のハーッサ (gassaあるいはhassa) には、Gassa bassar (大ハーッサ)とGassas Kyttil (小ハーッサ)の2種類があった (bassarとkyttilは、マレー語でそれぞれ「大きい」「小さい」を意味する besarおよび kecilに由来すると思われる [Wilkinson 1901-1903: 99, 506])。前者は長さ8尋幅5スパンの上質な薄い布で、一般には両端に赤い縞が細く入っていたが、なかにはこの縞がないものもあった。他方、後者は長さ5尋、幅3スパンの大きさであり、これらは2種類ともマルク諸島で需要があったと伝えられる [Memorie 1603: XIV-XV]。なお、19世紀初頭以前のオランダにおける尋 (vadem)は、1ラインラント尋 (Rijnlandsche vadem) が1.884メートル、1アムステルダム尋 (Amsterdamsche vadem) が1.698メートルに相当するとされる [WNT: Vadem]。(W)

Linschotenはベンガル地方で生産される綿織物の一つにcassaを挙げている [Linschoten: I, 71; Linschoten (Jtr.): 175]。オランダ東インド会社が1617年、コロマンデル地方でアンボイナ向けに調達した商品のリストに、「白い上等のkhasa」が見える [DFI 1617-1623: 55]。1622年の書簡にはバタヴィアにおける「ベンガルのkhasa」に対する需要が伝えられており [DFI 1617-1623: 198]、同会社がグジャラート地方で「ベンガルのkhasa」を取り扱っていたことも記録にある [DFI 1617-1623: 97, 131, 184; DFI 1624-1627: 79, 119, 151, 266-269, 292]。東南アジア諸地域におけるこの布に対する需要は、17世紀アチェにおいて、ベンガルから入港する船舶に「カサ布」の上納が課されていたことにも対応するはずである [井東1977: 131]。なお本表ではハーッサは綿布の一種とされているが、オランダ東インド会社の資料には「ベンガルの絹のkhasa」という表現もあり、khasaの語がもつばら綿布のみを指したというわけではなさそうである [DFI 1617-1623: 255; DFI 1624-1627: 283]。(M)

102 この綿布の一覧表においては、表示された価格の単位量が明記されていない項目がほとんどである。Blochmannは「1枚あたり」と訳しているが、その根拠は不明である [AA (Etr.): I, 100-101]。(M)

チャウタール (čawtār ¹⁰³)	ペルシア語のジームのファトゥハ、ワーウのスクーン、上双点付きター、アリフ、ラーのスクーン	2ルピーから9ムフルまで
マルマル (malma ¹⁰⁴)	ミームのファトゥハ、ラームのスクーン、ミームのファトゥハ、ラームのスクーン	4ルピー
タンスク (tansuk ¹⁰⁵)	上双点付きターのファトゥハ、ヌーンのスクーン、スィーンのダンマ、カーフのスクーン	4ルピーから5ムフルまで
スィリーサーフ (sirīšāf)	スィーンとラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン、サード、アリフ、ファー	2ルピーから5ムフルまで

103 čaw はヒンディー語で合成語に使われて4を意味する。čawtār で「4本の糸」、あるいは「4本の糸を持つ (もの)」を指す [Platts 1884: 447a]。Linschoten はカンバート (Cambaja) の国【ゲジャラート地方】で作られる綿織物のひとつとして chautares を挙げる [Linschoten: I, 46; Linschoten (Jtr.): 133]。Pelsaert はアークラで調達できる綿布の一種として chouters に言及する [Pelsaert R: 268]。Roques によると、当時ダルヤーバードのチャウタール (chianters deriabadis あるいは chiauxters deriabadis) として知られた布があり、chauderas と呼ばれたスィロン産の白い織物もこれと同じものとされる [Roques: 117, 123]。『瀛涯勝覧』にベンガル地方の産物として挙げられている沙撈児もこれにあたると言われる [馬敏 (Jtr.): 158; Habib 2003: 529]。また [Yule & Burnell 1903: 706b] も見よ。(W)

ベンガル地方に産するチャウタール chautares については Barbosa も言及している [Barbosa : II, 319]。オランダ東インド会社がコロマンデル地方で調達した商品 (年代はおそらく 1617 年) のリストに、チャウタールが見える。プラカーシュによれば、チャウタールは平織りの (plain) 白いキャリコであったという [DFI 1617-1623: 42, n. 5]。(M)

104 Irwin によれば、英語史料においては malmal のみならず mulmull, mollmol, mulmal などの語形でも現れ、ベンガルに産する上質の綿モスリンを指したという [Irwin 1957: 70]。Pelsaert がジャガンナート (Ziagenatt) の産物の一つとして挙げる malmol も同じものを指しているはずである [Pelsaert R: 253]。また [Yule & Burnell 1903: 595b-596a] も見よ。(M)

ヒンディー語で malmal は綿モスリンを意味する [古賀・高橋 2006: 1048a]。Platts によれば、その語源はおそらくサンスクリット語の mṛḍu を重ねた mṛḍu-mṛḍu (字義は very soft) [Platts 1884: 1065b]。オランダ語史料では mallemol, mallemollen, malmali, malemoelij などの形で綴られ、マルダーやフーグリなどベンガル地方の商館を通じて入手される上質の綿モスリンとして、しばしばハーッサ [本訳注 48 頁] とともに言及される。例えば [GM: III, 645; IV, 254; Van Dam: II-2, 49, 72, 74, 79] など。(W)

105 底本は tansukh と作り、読みの末尾にも帯気音の hā-yi ḥafi を付するが、諸写本のいずれもこれを採らない。ここでは諸写本のテキストに従った [AA Ms. A: 46r; AA Ms. B: 51v; AA Ms. C: 40v]。(M)

ガンガージャル (gangāḡal ¹⁰⁶)	ペルシア語のカーフのファトゥハ、ヌーンのスクーン、ペルシア語のカーフ、アリフ、ジームのファトゥハ、ラームのスクーン	4ルピーから5ムフルまで
バイラウン (bhayrawn ¹⁰⁷)	バーのファトゥハ、隠れたハー、下双点付きヤーのスクーン、ラーのファトゥハ、ワーウのスクーン、隠れたヌーン	4ルピーから4ムフルまで
サハン (sahan ¹⁰⁸)	スイーンとハーのファトゥハ、ヌーンのスクーン	1ムフルから3ムフルまで
ジョーナナー (ḡhōnah ¹⁰⁹)	ジームのオー発音ダンマ、隠れたハー、ワーウのスクーン、ヌーンのファトゥハ、書かれただけのハー	1ルピーから1ムフルまで
アターン (aīān)	ハムザのファトゥハ、ヒンド語の上双点付きター、アリフ、ヌーンのスクーン	2 1/2ルピーから1ムフルまで

106 本書に後出するベンガル州の地誌には、Bārbakābād 県 (sarkār) の産物として「ガンガージャルの布」pārčah-i gangāḡal が言及されている [AA: I, 390]。 (M)

Pelsaert がヴァラナーナシー (Bonares) の産物として挙げる白い織物 gangazel はおそらくガンガージャルのことであろう [Pelsaert R: 252]。 (W)

107 Blochmann は Bhīraun と綴るが [AA (Etr.): I, 100]、ここでは底本の「読み」に従う。Habib によると、Baranī が上等の布の一つとして挙げる bhayram、あるいは Ibn Baṭṭūṭah が Muḥammad b. Tuḡluq から託された元朝への贈物のなかにあった綿布 bhayramī と同種のものである [TFSB: 311; IB: IV, 2; IB (Jtr.): VI, 17; Habib 2003: 528]。FJ および FR では bayram で項目があり、綿布の一種で mitqālī のようだが、それよりも薄く繊細であると説明されている [FJ: II, 2224-2225; FR: I, 182-183]。なお mitqālī は麻布あるいは亜麻布の一種とされる [Steingass 1892: 1172b]。Irwin によると、欧語文献では byrams, beirame, beram などと綴られ、16世紀には上質の白キャリコとして有名だったが、17世紀の文献ではアジア市場向けに赤や青、あるいは黒に染められる下級の粗いキャリコとして言及されるという [Irwin 1955: 26]。オランダ語史料では、グジャラートから輸出される綿布の一種として挙げられており、例えば Geleynssen は、ブルーチヤヴァドーダラー、アフマダーバードで作られていると述べる [G. de Jongh: 11, 27-28, 42]。また Roques は、アフマダーバードで作られ、バスラ向けに青く染められる布であるとし、その品質については、一般的な下級綿布の一種として知られた dungrī よりも少し目が詰まっいて値段も高いと伝える [Roques: 85]。ほかに [Yule & Burnell 1903: 81b-82a] も参照のこと。 (W)

Linschoten は beyram というインド産の布がジャワ島で取引されることを伝えている [Linschoten: I, 86; Linschoten (Jtr.): 203]。 (M)

108 Irwin によれば、英語史料に sahan, sahun, の語形で現れる丈夫なキャリコで、オリッサ地方の特産であるという [Irwin 1957: 71]。Pelsaert が伝える tsehen という「美しい幅広の布で、寝床のシーツに使える」ジャガンナート (Ziagenatt) 特産の布もこれにあたる [Pelsaert R: 253]。 (M)

109 「読み」の末尾は、底本では hā-yi maktūb だが、諸写本の記述に従い hā と改めた [AA

アサーワリー (asāwalī)	ハムザのファトゥハ、スィーン、アリフ、ワーウのファトゥハ、ラームのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	1ムフルから5ムフルまで
バーフタ (bāftah ¹¹⁰)	バー、アリフ、ファーのスクーン、上双点付きターのファトゥハ、書かれただけのハー	1 1/2ルピーから5ムフルまで
マフムディー (maḥmūdī ¹¹¹)		1/2ムフルから3ムフルまで
パンチュトリーフ (pančtōlīh ¹¹²)	ペルシア語のバーのファトゥハ、隠れたヌーン、ペルシア語のジームのスクーン、上双点付きターのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、ラームと下双点付きヤーのカスラ、ハー	1ムフルから3ムフルまで
ジョーラー (ḡhōlah)	ジームのオー発音ダンマ、隠れたハー、ワーウのスクーン、ラームのファトゥハ、書かれただけのハー	1/2ムフルから2 1/2ムフルまで
サールー (sālū ¹¹³)	スィーン、アリフ、ラームのダンマ、ワーウのスクーン	3ルピーから2ムフルまで

Ms. A: 46r; AA Ms. B: 51v; AA Ms. C: 40v]。(W)

110 「織られたもの」を意味するペルシア語に由来する語であるが、本表であたかもインド語由来の語彙のごとく発音が説明されていることは不可解である。Irwinによれば、無地のキャリコ(平織り綿布)の総称で、白色の他、赤、青、黒に染められたという [Irwin 1955: 25]。Linschotenはグジャラート地方で生産される綿織物の一つとして boffeta を挙げる [Linschoten: I, 46; Linschoten (Jtr.):133]。また [Yule & Burnell 1903: 47a-47b] も見よ。(M)

Geleynssen de Jongh は、17世紀前半のバルーチやヴァードーダラーで作られ、東南アジアおよび西アジアの各地にもたらされる織物の一種としてこれを挙げる。バルーチでは「最良で最も上質なバーフタ」が、ヴァードーダラーでは「黒と白のバーフタ」が作られていたという [G. de Jongh: 10-11]。1603年のオランダ語史料にも、バーフタはグジャラートで入手される「白と黒の綿布」でバンダ諸島で大いに需要がある旨の記述が見られる [Memorie 1603: XI]。(W)

111 イランにおいてこの語が絹布の一種を指した例があることについては [Floor 1999: 168]。ヒンディー語では A fine sort of muslin との意味もある [Platts 1884: 1010b]。(M)

112 Blochmann は panchtoliya と綴るが [AA (Etr.):I, 101]、ここでは底本の「読み」に従う。(W)

113 英語史料に見える sallowe にあたるか。Irwinによると、これはターバン布として用いられる良質の綿モスリンであって、刺繍ないし錦織を施されるのが通常であったという [Irwin 1955: 30]。一方、テルグ語で布を意味する sālū に帰する説については [Yule & Burnell 1903: 818b-819b]。(M)

ドーリヤー (dōriyah ¹¹⁴)	ダールのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、ラーのカスラ、下双点付きヤーのファトゥハ、書かれただけのハー	6ルピーから2ムフルまで
バハドウル・シャーヒー (bahādur šāhī ¹¹⁵)		6ルピーから2ムフルまで
ガルバー・スーティー (garbah sūti ¹¹⁶)	ペルシア語のカーフのファトゥハ、ラーのスクーン、バーのファトゥハ、隠れたハー ¹¹⁷ 、スイーンのダンマ、ワーウのスクーン、上双点付きターのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	1 1/2ムフルから2ムフルまで
デカンのシェラー (šēlah-i dakni ¹¹⁸)	点付きシーンのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、ラームのファトゥハ、書かれただけのハー	1/2ムフルから2ムフルまで
ミフル・クル (mihir kul)	ミームのカスラ、ハーとラーのスクーン、カーフのダンマ、ラームのスクーン	3ルピーから2ムフルまで

ヒンディー語で *sālū* は「めでたい時に用いられる緋木綿」あるいは A kind of fine red cloth. Turkey red との語釈がある [古賀・高橋 2006: 1345a; Platts 1884: 627a]。Master が伝える 17 世紀後半にコロマンデル海岸北部で入手された *sālū* (Sallos ないし Salloes) も同様に赤い綿モスリンと見なされているが [Master: I, 134, 257, 272]、一方でペルシア語としてはターバンに適した白く狭い幅の布あるいはターバンや婦人服を作る布地という意味がある [Dihḥudā: *sālū*]。赤以外の布に対してこの語が使われた事例に、17 世紀前半の Geleynssen de Jongh がポルトガル船がカンバートからモザンビークに運んでいた品物のひとつとして挙げる「黒い *salus*」がある [G. de Jongh: 33]。(W)

114 参照した英語訳 (Phillott の編集による第 2 版) はこの語を "Doriva" と記すが、これは誤植に過ぎない [AA (Etr.): I, 101]。英語訳初版 (Calcutta, 1868-1873) は正しく "Dōriyah" と記している [AA (Etr.) I: I, 95]。Irwin によれば、英語史料に *dorea* と現れる布は、綿布ではなく、綿・絹の交織であり、ベンガル地方北部の Malda-Kasimbazar 地域で生産される縞柄あるいは市松柄の布であるという [Irwin 1957: 68-69]。また [Yule & Burnell 1903: 325b] も見よ。(M)

115 「バハドウル・シャー風 (の綿布)」を意味する語であるが、詳細は不明である。(M)

116 *garbah* については詳細不明。*sūt* はヒンディー語で糸ないし木綿糸を意味する名詞であり、*sūti* は「木綿の、綿製の」を意味する形容詞である。[古賀・高橋 2006: 1372b]。(M)

117 底本は「書かれただけのハー」と作るが、諸写本の異文「隠れたハー」*hā-yi ḥafi* を採った [AA Ms. A: 46v; AA Ms. B: 52r; AA Ms. C: 41r]。(M)

118 Linschoten が伝える、コロマンデル海岸の上質の綿布 *cheylas* がこれに相当するだろう [Linschoten: I, 68; Linschoten (Jtr.): 170]。また、1603 年のオランダ語史料にも、コ

ミンディール		1/2ムフルから2ムフルまで
サル・バンド (sar band ¹¹⁹)		1/2ムフルから2ムフルまで
肩掛け布		1ルピーから1ムフルまで
カターンチャ (katānčah)		1ルピーから1ムフルまで
腰布		1/2ルピーから6ルピーまで
耳覆い (gūš pīč ¹²⁰)		1ルピーから2ルピーまで
チェーント (čhēnt)	ペルシア語のジームのエー発音カスラ、隠れたハー、下双点付きヤーのスクーン、無音のヌーン、ヒンド語の上双点付きターのスクーン	1ガズあたり2ダームから1ルピーまで
ガズィナー (gazīnah ¹²¹)		1/2ルピーから1 1/2ルピーまで
スラーハティー (slāhātī ¹²²)	スイーン、ラム、アリフ、ハーのファトゥハ、ヒンド語の上双点付きターのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	1ガズあたり2ダームから4ダームまで

ロマンデル海岸中部で入手される *Tscheylles* についての記述がある。これは黒の格子縞をもつ、主として白地（一部は黄色地）のとても美しい綿布であったという [Memorie 1603: XII]。一方、Geleynssen de Jongh は17世紀前半のバルーチやヴァードダラー、アフマダーバードで産出する織物のひとつとして *chelas* ないし *selas* という名称を挙げる。ヴァードダラー産のものは赤や青、アフマダーバード産は赤や黒であったという [G. de Jongh: 11, 42]。Pelsaert もスーラトから積み出される織物のなかに *chela's* があったことを伝える [Pelsaert R: 288, 289]。(W)

119 「頭に巻くもの」を意味するペルシア語で、Irwin によると布地の名称としては、ダッカ地方で生産される上質の綿モスリンを指す *seerband* という用語が英語史料に在証されるという [Irwin 1957: 71]。(M)

120 防寒のため頭と耳の周りに巻く布 [Dihḥudā: gūš pīč]。(M)

121 FJ には、テントや帳や覆い布などを作るための粗い白木綿 (*kirbās*) との説明がある [FJ: I, 1215]。Habib によると、*gazī* と呼ばれ、英語史料に *guzzees* として表れる粗いキャリコのこであるという [Habib 2003: 532]。イギリス東インド会社文書に見られる *guzzee* は、バーフタに似た細幅の平織り綿布の一種で、アングラの近くで多く作られるとされる。この布に染めや絵付けを施すこともあったようで、1640年のある報告によれば、大抵は加工されて「青いバーフタ」になると言われている [EFI 1637-1641: 278; EFI 1642-1645: 6-7, 137, 300]。(W)

122 この名称はハラジー朝君主 'Alā' al-Dīn Ḥalaḡī が講じた価格統制の対象となった各種

<I, 110-111>

羊毛のもの		
名前 ¹²³	読み	価格
ルーム、ファラング、ポルトガル (Purtugālī) の毛織物 (saqlāt)		1ガズあたり2 1/2ルピーから4ムフルまで
ナーガウリーとラホーリー		1枚あたり2ルピーから1ムフルまで
正方形の粗毛織物 (ṣūf-i murabba')		1点あたり4ムフルから15ムフルまで
粗毛織物 (ṣūf-i maḥr ¹²⁴)		1点あたり3ルピーから1 1/2ムフルまで
パルム・ナルム		2ルピーから20ムフルまで
パルム・ナルムのターバン布		2ルピーから25ムフルまで
腰布		1/2ムフルから3ムフルまで
大型の ¹²⁵ パルム・ナルム (ḡāmawār-i prm narm)		1/2ムフルから4ムフルまで
耳覆い		1 1/2ルピーから1 1/2ムフルまで
ターバン飾り布 (sar-pič ¹²⁶)		1/2ムフルから4ムフルまで
アグリー (aḡrī)		7ルピーから2 1/2ムフルまで
パルム・ガルム		3ルピーから2 1/2ムフルまで
カタース (katās)	カーフのファトゥハ、上双点付きのター、アリフ、スイーンのスクーン	2 1/2ルピーから10ムフルまで
プーク (phūk)	ペルシア語のバーと隠れたハーのダンマ、ワーウとカーフのスクーン	2 1/2ルピーから15ルピーまで
ドゥルマー (durmah ¹²⁷)	ダールのダンマ、ラーのスクーン、ミームのファトゥハ、書かれただけのハー	2ルピーから4ムフルまで

の絹布の一つとして史料に見えるが、綿布を示す本表に現れる語といかなる関係にあるか、定かでない。なおその上級品、中級品、下級品はそれぞれ6 tankah, 4 tankah, 2 tankahの価格が定められたという(単位量についての記述は無い) [TFSB: 310]。(M)

123 底本には見出し項目の行がないが、諸写本に従い補った。(M)

124 maḥrの語義は不明である。AA Ms. AおよびAA Ms. Cはṣūf-i šaḡarと読める [AA Ms. A: 46v; AA Ms. C: 41r]。(N)

125 Irwinはḡāmawārの意味を"sufficient for a Jāma (gown)"とする [Irwin & Schwartz 1966: 66]。(N)

126 ウルドゥー語ではターバンにかぶせて巻きつける飾りの布としての意味がある [Platts 1884: 648a-b]。(N)

127 ウルドゥー語ではマットレスの一種を指す [Platts 1884: 513b]。(N)

パトウー (paṭū ¹²⁸)	ペルシア語のバーのファトゥハ、ヒンド語の上双点付きターのダンマ、ワーウのスクーン	1ルピーから10ルピーまで
レーウカール (rēwkār)	ラーのエー発音カスラ、下双点付きのヤーとワーウのスクーン、カーフ、アリフ、ラーのスクーン	2ルピーから1ムフルまで
ミスリー		5ルピーから15ルピーまで
イエメンのブルド (burd-i yamānī ¹²⁹)		5ルピーから35ルピーまで
フェルトのヤーパンジー (yāpanḡī-yi namad ¹³⁰)		2ルピーから1ムフルまで
フェルトのKNPK (KNPK-i namad ¹³¹)		2ルピーから1ムフルまで
遠国産のクッション (takyah namad-i wilāyatī)		132
ヒンドのクッション (takyah namad-i hindī)		1 1/2ルピーから5ルピーまで
ローイー (lōī ¹³³)	ラームのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、下双点付きヤーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	14ダームから4ルピーまで
カンバル (kanbal ¹³⁴)	カーフのファトゥハ、隠れたヌーン、バーのファトゥハ、ラームのスクーン	10ダームから2ルピーまで

128 ウルドゥー語では、paṭū という発音で粗い毛織物の一種を指す [Platts 1884: 228a]。(N)
イランに関する欧語史料で、山羊の毛で製したケルマーン産の毛織物にこの語を充てる例があることについては [Floor 1999: 184-85]。(M)

129 burd が特にイエメン産の縞柄の布を指す語としてアラビア語史料に現れることについては [Serjeant 1948: 76, 83-86]。(M)

130 底本は mānḡī とするが、AA Ms. A の yābanḡī という語形から、yāpanḡī との読みを導いた [AA Ms. A: 46v]。ヤーパンジーについては本訳注 31 頁に既出である。Blochmann はこれを Mānjī namad としているが、自ら (?) を示しているとおおり、その読み方には確証はない [AA (Etr.) : I, 102]。(N)

131 AA Ms. A は KPNK namad とも読める [AA Ms. A: 46v]。Blochmann はこれを Kanpak namad としているが、自ら (?) を示しているとおおり、その読み方には確証はない [AA (Etr.) : I, 102]。(N)

132 AA Ms. A のみ [1 1/2ルピーから5ルピー] との価格の記載あり [AA Ms. A: 46v]。(N)

133 ウルドゥー語では毛布、ヒンディー語では細い毛を用いた毛布を指す [Platts 1884: 972a; 古賀・高橋 2006: 1202a]。(N)

134 ウルドゥー語やヒンディー語では、kambal という綴りで毛布あるいは毛織物の衣服

カシュミールの帽子 (kulāh)		2 ダームから1ルピーまで
----------------------	--	---------------

参考文献

一次文献

- AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbarī*. H. Blochmann (ed.), Calcutta, 2 vols., 1867-1877.
- AA D: do., Sayyid Aḥmad (ed.), Dihlī, 1272 AH (1855/6) (Repr. 'Aligāfīh, 2005).
- AA L: do., Lakhna'ū, 1869.
- AA (Etr.): H. Blochmann (vol. 1) & H. S. Jarrett (vols. 2, 3) (trs.). (Rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar), Calcutta, 3 vols., 1927-1949.
- AA (Jtr.)(6): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (6)」『紀要』(神戸大学文学部) 45, 2018, pp. 1-44.
- AA Ms. A: Ms. Add. 7652, British Library.
- AA Ms. B: Ms. Or. 2169, British Library.
- AA Ms. C: Ms. Add. 6552, British Library.
- AAB: Asad Beg Qazwīnī, *Aḥwāl-i Asad Beg*. Ms. Fann-i Sawāniḥ-i 'Umrī 41, Andhra Pradesh Government Oriental Manuscripts Library and Research Institute.
- AIN: Muḥammad Kāzīm, *Ālamgīr Nāmah*, Ḥādīm Ḥusayn & 'Abd al-Ḥayy (eds.), Calcutta, 1865-1868.
- BA: Lālā Tik Čand, *Bahār-i 'Aḡam*, 2 vols., Lakhna'ū, 1879.
- Barbosa: Duarte Barbosa, *O livro de Duarte Barbosa*. Maria Augusta da Veiga e Sousa (ed.), 2 vols., Lisboa, 1996-2000.
- Barros IV: *Quarta decada da Asia de Ioaõ de Barros: Dos feitos que os Postugueses fizeraõ no descobrimento, e conquista dos mares, e terras do Oriente*. Madrid, 1615 (Repr. Lisboa, 2001).
- Bernier: François Bernier, *Voyages de François Bernier docteur en medecine de la faculte de Montpellier*. F. Tinguely, A. Paschoud & Ch.-A. Chamay (eds.), *Un libertin dans l'Inde Moghole: Les voyages de François Bernier (1656-1669)*, Paris, 2008.
- Bernier (Jtr.): 関美奈子・倉田信子訳『ムガル帝国誌』岩波書店、1993.
- BNL: 'Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, *Pādšāh Nāmah*. Kabīr al-Dīn Aḥmad & 'Abd al-Raḥīm (eds.), 2 vols., Calcutta, 1866-1868.
- Cunningham: Alexander Cunningham, *Ladak: Physical, Statistical, and Historical; with Notices of the Surrounding Countries*, London, 1854.
-
- を指す [Platts 1884: 847b; 古賀・高橋 2006: 178b]。(N)

- DFI 1617-1623: Om Prakash, *The Dutch Factories in India 1617-1623*. New Delhi, 1984.
- DFI 1624-1627: Om Prakash, *The Dutch Factories in India: A Collection of Dutch East India Company Documents Pertaining to India. Vol. II [1624-1627]*. New Delhi, 2007.
- EFI 1637-1641: *The English Factories in India, 1637-1641*. William Foster (ed.), , Oxford, 1912.
- EFI 1642-1645: *The English Factories in India, 1637-1641*. William Foster (ed.), , Oxford, 1913.
- FJ: Ġamāl al-Dīn Ḥusayn b. Ḥasan Injū Šīrāzī. *Farhang-i Ġahāngīrī*. Raḥīm 'Afrīfī (ed.), 3 vols., Mašhad, 1972-1975.
- FR: 'Abd al-Rašīd Tattawī. *Farhang-i Rašīdī*. Mawlawī Dū al-Faqār 'Alī & Mawlawī 'Azīz al-Raḥmān (eds.), 2 vols., Calcutta, 1875.
- G. de Jongh: *De remonstrantie van W. Geleynssen de Jongh*. W. Caland (ed.), 's-Gravenhage, 1929.
- GM: *Generale missiven van gouverneurs-generaal en raden aan heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie*. W. Ph. Coolhaas et al. (eds.), 13 vols., The Hague, 1960-2007.
- IB: Ibn Baṭṭūṭah, *Tuḥfat al-Nuẓẓār fī Ġarā'ib al-Amṣār wa 'Aġā'ib al-Asfār*. C. Defrémery & B. R. Sanguinetti (eds. & trs.), 4 vols., Paris, 1853-1859.
- IB (Jtr.): 家島彦一訳『大旅行記』平凡社, 8 vols., 1996-2002.
- INJ: Mu'tamad Ḥān, *Iqbāl Nāmah-i Ġahāngīrī*. Lakhna'ū, 1870.
- JN (A): Nūr al-dīn Muḥammad Ġahāngīr, *Ġahāngīr Nāmah*, Syud Ahmud Khan (ed.), Ghazeeapore & Ally Gurh, 1863-1864.
- JN (T): do., *Ġahāngīr Nāmah*, Muḥammad Hāšim (ed.), Tihrān, 1359 Sh.
- JN (Etr.) (Rogers): A. Rogers (tr.), H. Beveridge (ed.), London, 1909-1914.
- JN (Etr.) (Thackston): W. M. Thackston (tr.), Washington, D.C. and Oxford, 1999.
- KhF: Amīr Ḥusraw, *Ḥazā'in al-Futūḥ*. M. W. Mīrzā (ed.), Calcutta, 1953.
- Linschoten: Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario, voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien*. H. Kern & H. Terpstra (eds.), 3 vols., 's-Gravenhage, 1955-1957.
- Linschoten (Jtr.): 岩生成一・渋沢元則・中村孝志訳『東方案内記』岩波書店 1968.
- LSJ: Muḥammad Aḥsan Bilgrāmī, *Luġāt-i Šāh-Ġahānī*. Rayḥānah Ḥātūn (ed.), Dilhī, 2003.
- 馬敏 (Jtr.): 小川博『瀛涯勝覽: 中国人の南方見聞録』吉川弘文館、1998.
- MAI: Mustā'idd Ḥān, *Ma'āṭīr-i 'Ālamgīrī*. Āġā Aḥmad 'Alī (ed.), Calcutta, 1870-1873.
- Master: *The Diaries of Streyنشam Master, 1675-1680*. R.C. Temple (ed.), 2 vols., London, 1911.
- MDC: [The Malda Diary and Consultaions]. W. K. Firminger (ed.), The Malda Diary and Consultaions (1680-1682). *Journal of the Asiatic Society of Bengal. New Series*, 14,

1918, pp. 1-241.

- Memorie 1603: Bijlage III. Memorie van Nov. 1603 over den toenmaligen handel, voornamelijk met lijnwaden, in Voor-Indië. In: G. P. Rouffaer & H. H. Juynboll, *De batik-kunst in Nederlandsch-Indië en haar geschiedenis*. Haarlem & Utrecht, 1899-1914.
- MI: Ānand Rām Muḥliṣ, *Mir'āt al-Iṣṭilāḥ*. C. Shekar, H. Qiličhānī & H. Yūsufdiḥī (eds.), Tihṛān, 1395 Sh.
- Moorcroft & Trebeck: *Travels in the Himalayan Provinces of Hindustan and the Panjab; In Ladakh and Kashmir; In Peshawar, Kabul, Kunduz, and Bokhara; By Mr. William Moorcroft and Mr. George Trebeck, from 1819 to 1825*, 2 vols., London, 1841.
- MQSM: Maḥmūd b. 'Abd Allāh Nīšāpūrī, *Ma'āṭir-i Quṭb Šāhī-i Maḥmūdī*. Ms. IO Islamic 841, British Library.
- MR: 'Abd al-Bāqī Nihāwandī, *Ma'āṭir-i Raḥīmī*, M. Hidayet Hosain (ed.), 3 vols., Calcutta, 1924-1931.
- Pelsaert K: Francisco Pelsaert, Kroniek van Mughal Indië. In: D. H. A. Kolff & H. W. van Santen (eds.), *De geschriften van Francisco Pelsaert over Mughal Indië, 1627: Kroniek en Remonstrantie*. 's-Gravenhage, 1979, pp. 59-242.
- Pelsaert R: Francisco Pelsaert, Remonstrantie. In: D. H. A. Kolff & H. W. van Santen (eds.), *De geschriften van Francisco Pelsaert over Mughal Indië, 1627: Kroniek en Remonstrantie*. 's-Gravenhage, 1979, pp. 245-335.
- Roe: Thomas Roe, [The Journal of Sir Thomas Roe]. W. Foster (ed.), *The Embassy of Sir Thomas Roe to India 1615-19: As Narrated in his Journal and Correspondence*. New and Revised Edition. Oxford, 1926 (Repr. New Delhi, 1990).
- Roques: George Roques, *La manière de négocier aux Indes, 1676-1691*. Valérie Bérinstain (ed.), Paris, 1996.
- TAAA: Iskandar Beg Munšī, *Tārīḥ-i 'Ālam-ārā-yi 'Abbāsī*. 3 vols., Tihṛān, 1334-1335 Sh.
- TAK: 'Arīf Qandahārī, *Tārīḥ-i Akbarī*, Ḥ. Mu'īn al-Dīn Nadwī, A. 'Alī Dihlawī & I. 'Alī 'Aršī (eds.), Rampur, 1962.
- Terry: Edward Terry, [A Relation of a Voyage to the Easterne India]. In: Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes*, vol. 9, Glasgow, 1905, pp. 1-54.
- TFSB: Ḍiyā' al-Dīn Baranī, *Tārīḥ-i Fīrūz Šāhī*. S. A. Khan (ed.), Calcutta, 1862.
- TNas: Muḥammad Ṭāhīr Naṣrābādī, *Taḍkirah-i Naṣrābādī*. Waḥīd Dastgirdī (ed.), n.d.
- Van Dam: Pieter van Dam, *Beschrijvinge van de Oostindische Compagnie, 1639-1701*. F. W. Stapel and C. W. Th. van Boetzelaer van Asperen en Dubbeldam (eds.), 7 vols., 's-Gravenhage, 1927-1954.
- ZRT: Śrīvara, *Zaina Rājataranṅiṇī*. K. N. Dhar (tr.), New Delhi, 1994.

二次文献

- Allsen, T. (1997) *Commodity and Exchange in the Mongol Empire*. Cambridge.
- Anwarī, H. (1381 Sh.) *Farhang-i Buzurg Suhan*, 8 vols., Tihriān.
- Burton, A. (1997) *The Bukharans: A Dynastic, Diplomatic and Commercial History 1550-1702*, Richmond.
- Chandra, M. (1961) Costumes and Textiles in the Sultanate period, *Journal of Indian Textile History*, 6, pp. 5-61.
- Dalgado, S. R. (1919-1921) *Glossário Luso-Asiático*. 2 vols., Coimbra.
- Dihjudā, A. A. *Luḡat-nāmāh*. <http://www.parsi.wiki/>
- Doerfer, G. (1963-1975) *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen. Unter besonderer Berücksichtigung älterer neupersischer Geschichtsquellen, vor allem der Mongolen- und Timuridenzeit*, 4 vols., Wiesbaden.
- Dolezalek, I. (2016) Comparing Forms, Contextualising Functions: Arabic Inscriptions on Textiles of the Norman King William II and Fatimid Ṭirāz. In: J. von Fircks & R. Schorta (eds.), *Oriental Silks in Medieval Europe*. Riggisberg, pp. 80-92.
- Floor, W. (1999) *The Persian Textile Industry in Historical Perspective, 1500-1925 (Moyen Orient & Océan Indien, XVI^e-XIX^e s., 11)*, Paris.
- Gokhale, B.G. (1969) Ahmadabad in the XVIIth Century. *The Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 12, pp. 187-197.
- Golombek, L. (1988) The Draped Universe of Islam. In: P. P. Soucek (ed.), *Content and Context of Visual Arts in the Islamic World*, University Park/London, pp. 25-49.
- Grierson, G. A. (1916-1932) *A Dictionary of the Kāshmirī Language*. Hertford.
- Habib, I. (1976) Indian Textile Industry in the 17th Century. In: D. Banerjee & al. (eds.), *Essays in Honour of Prof. S. C. Sarkar*, New Delhi, pp. 181-192.
- Habib, I. (1992) Akbar and Technology, *Social Scientist* 20(9/10), pp. 3-15.
- Habib, I. (2003) Textile Terms in Medieval Indian Persian Texts: A Glossary. *Proceedings of the Indian History Congress*, 64, pp. 525-547.
- Irwin, J. (1955) Indian Textile Trade in the Seventeenth Century. I. Western India, *Journal of Indian Textile History*, 1, pp. 5-33.
- Irwin, J. (1957) Indian Textile Trade in the Seventeenth Century. III. Bengal, *Journal of Indian Textile History*, 3, pp. 59-74.
- Irwin, J. & Schwartz, P. R. (1966) *Studies in Indo-European Textile History*. Bombay.
- Kooijmans, M. & J. Schooneveld-Oosterling (2000) *VOC-Glossarium. Verklaringen van termen, verzameld uit de Rijks Geschiedkundige Publicatiën, die betrekking hebben op de Verenigde Oost-Indische Compagnie*, Den Haag.

- Lane, E. W. (1863-1893) *An Arabic-English Lexicon*. London.
- Naqvi, H. K. (1967) Dyeing of Cotton Goods in the Mughal Hindustan (1556-1803). *Journal of Indian Textile History*, 7, pp. 45-56.
- Platts, J. T. (1884) *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī and English*, Oxford.
- Ritter, M. (2016) Cloth of Gold from West Asia in a Late Medieval European Context: The Abū Saʿīd Textile in Vienna: Princely Funeral, and Cultural Transfer. In: J. von Fircks & R. Schorta (eds.), *Oriental Silks in Medieval Europe*, Riggisberg, pp. 231-251.
- Rizvi, J. (1999) *Trans-Himalayan Caravans: Merchant Princes and Peasant Traders in Ladakh*. New Delhi.
- Rizvi, J. & Ahmed, M. (2017) *Pashmina: The Kashmir Shawl and Beyond*, Revised edition, Mumbai.
- Serjeant, R. B. (1946) Material for a History of Islamic Textiles up to the Mongol Conquest (Chapters VII to XIV). *Ars Islamica*, 11/12, pp. 98-145.
- Serjeant, R. B. (1948) Material for a History of Islamic Textiles up to the Mongol Conquest (Chapters XV to XVI). *Ars Islamica*, 13, pp. 75-117.
- Shivram, B. N. (2006) From Court Dress to the Symbol of Authority: Robing and 'Robes of Honour' in Pre-Colonial India. *Studies in Humanities and Social Sciences*, 13 (2), pp. 1-28.
- Steingass, F. (1892) *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London.
- Stillman, Y. K. & Sanders, P. (E12) Ṭirāz. *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, BrillOnline (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_1228).
- Stillman, Y.K., N.A. Stillmann & T. Majda (E12) Libās. *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, BrillOnline (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_0581).
- Wilkinson, R.J. (1901-1903) *A Malay-English Dictionary*, Singapore.
- WNT. *Woordenboek der Nederlandsche Taal*. (<https://ivdnt.org/onderzoek-a-onderwijs/lexicologie-a-lexicografie/wnt>)
- Yule, H. & Burnell, A. C. (1903) *Hobson-Jobson: A Glossary of Anglo-Indian Colloquial Words and Phrases, and of Kindred Terms*. London.
- Yūsufi, Gh.-H. (E1r) Clothing, xxvii. Historical Lexicon of Persian Clothing. *Encyclopaedia Iranica*, V/8, pp. 856-865; available online at <http://www.iranicaonline.org/articles/clothing-xxvii> (accessed online at 15 August 2018).
- Zenker, J. T. (1866-1876) *Türkisch-Arabisch-Persisches Handwörterbuch*, Leipzig.
- 井東猛 (1977) 「17世紀アチエにおける通商諸法規：港湾諸法規を中心として (1)」『南方文化』4, pp. 121-149.
- 鎌田由美子 (2016) 『絨毯が結ぶ世界：京都祇園祭インド絨毯への道』名古屋大学出版会。
- 黒柳恒男 (2002) 『新ペルシア語大辞典』大学書林。

古賀勝郎・高橋明(2006)『ヒンディー語=日本語辞典』大修館書店.

高松洋一(2017)「一八世紀オスマン帝国における航海貿易の一断面：問答集『ジッダ港の統治の秩序のために準備された諸留意点』」川分圭子・玉木俊明編『商業と異文化の接触：中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開』吉田書店, pp. 719-749.

和田郁子(2008)「ミール・ムハンマド・サイドと港市マスリパトナムーゴールコンダ王国時代のミール・ジウムラによる交易活動と港市支配」『西南アジア研究』68, pp. 40-62.